



# 風狂

同人誌（2015年版上半期）

風狂の会

詩

古道歩き	なべくらますみ	(2015年6月登録)
愛の摂理	高村 昌憲	(2015年6月登録)
希望の痛み	高村 昌憲	(2015年5月登録)
ビジネスホテル	なべくらますみ	(2015年5月登録)
淋しさは霖雨のやうに	中平 耀	(2015年5月登録)
虫の音	北岡 善寿	(2015年4月登録)
老女	なべくらますみ	(2015年4月登録)
花粉症の戒め	高村 昌憲	(2015年4月登録)
電波ジャック	原 詩夏至	(2015年4月登録)
鶴が居る村	なべくらますみ	(2015年3月登録)
電線のある風景	高村 昌憲	(2015年3月登録)
憑きもの	北岡 善寿	(2015年2月登録)
閑話休題	中平 耀	(2015年2月登録)
英語の授業	高村 昌憲	(2015年2月登録)
壁画	長尾 雅樹	(2015年2月登録)
じいじときょうだい	原 詩夏至	(2015年2月登録)
お転婆な老嬢たち (II)	なべくらますみ	(2015年2月登録)
錯誤	北岡 善寿	(2015年1月登録)
陰影	長尾 雅樹	(2015年1月登録)
ダイレクトメール	高村 昌憲	(2015年1月登録)

エッセイ・随筆

日くつきの座談会から (一)	北岡 善寿	(2015年5月登録)
日くつきの座談会から (二)	北岡 善寿	(2015年6月登録)
民話から	北岡 善寿	(2015年3月登録)
美しい土地、美しい人 (一)	宿谷 志郎	(2015年1月登録)
美しい土地、美しい人 (二)	宿谷 志郎	(2015年4月登録)
淫靡な面は作れない	神宮 清志	(2015年6月登録)
ニューヨーク散歩道 (一)	松下 美知代	(2015年3月登録)
ニューヨーク散歩道 (二)	松下 美知代	(2015年6月登録)

覚え書き

二〇一四年十二月七日「風狂の会」覚え書き	堀口 精一郎	(2015年1月登録)
----------------------	--------	-------------

## 翻訳

アラン『わが思索のあと』（十一） 高村 昌憲 訳 （2015年6月登録）

執筆者のプロフィール

新聞のお知らせ欄で見つけた歩きのイベント

「古道探索会」

火曜日の午前十時に集合

わたしのような気楽な一人参加が多く

当然若い人の姿はない

一番若い講師先生 五十歳を少し過ぎた位か

元気が良くて歩きも速い

声も大きい

適度に冗談なんかも言って

気を遣ってくれる

ぞろぞろと繋がる

六十人 えっ 七十人？

静かなアパート群のはずれを

遠慮がちに歩く

バルンダで布団を干す人の怪訝そうな顔

散歩をする この一団と同年輩と見える男性は

何やら恐ろしいものを見るように

少し顔を背けて道を避ける

世話役の一人が大声で車が来ることを告げると

同時に湧き上がる世話人さんたちの声

鳴き交わし飛んでゆくオナガドリも負けそう

人たちは歩道へ上がり

車は速度を落として我が道を行く

行儀の良いそれぞれ

いにしえの人々は信号も歩道の区別もなく

ひたすら歩き

その道は草生して今も細々と続いている

いざ鎌倉へと続く古道には

馬の駆け抜ける音が響き

剣術の出稽古へと赴く土方歳三

近藤勇らの笑顔が見える

疲れという言葉を知らない先生に引っ張られて

無理なく歩いた一万歩と少々

はじめて会った人たちと

少しばかりの連帯感が生まれ

軽口に笑いも漏れて

風が涼しい と肩で息を着く同好の人たち

空ろな手は手を求めて手を繋ぐ  
乾いた腕は腕を求めて腕を組む  
夏の素肌は素肌を求めて海を泳ぐ  
言葉は言葉を求めて会話が弾む

求めれば逃げ出してしまうから  
求めないで同じもので確かめよ！  
真に求めるものは孤独であるから  
対になればそれで完成おさらばよ

眼も耳も鼻孔も対になっている  
自らを超える別次元への旅立ち  
お互いが同じもので出来ている  
代わるものが無いのは孤独な口

不完全な口はもう一つの口を求め  
その邂逅から新しい自分が生まれる  
孤独な男と女の絶対の関係を諦め  
触れることで相対の関係を発見する

触れて出来た関係は深くなるが  
それでも愛が永遠であることはなく  
歌は歌を求めてデュエットするが  
触れずに出来た関係だけが永く続く

テニスボールを追い駆けながら  
両足が纏れて左肩から転倒した  
当初は余り痛みが無かったから  
時間が経てば治るつもりでいた

ベンチで休んでいても治らない  
倒れた時の不審な音を思い出す  
そう言えば二回位鳴ったらしい  
二次会を諦めて歩くと痛みが増す

医者に診せたら左鎖骨の骨折らしい  
生まれて初めて経験する痛みだった  
完全に治すには手術が必要らしい  
でも自然の儘でも治るようだった

一晩経ち二晩経っても変わらないから  
CT検査を受けたら骨がずれていた  
この儘治る希望の無い痛みが続くなら  
三泊四日で手術を受けることにした

全身麻酔から覚めても同じ様に痛い  
宇宙旅行から帰還した時の様に妻がいた  
痛みにも希望があるのを初めて知ったが  
骨が付くように妻の親切が心の芯に染みた

昨夜は  
簡単なテーブルと椅子をおいただけのフロアー  
照明を落とした薄暗さの中  
頑丈そうな自動販売機が光り輝いていた  
缶ビールやペットボトルの水

フロアーは夜明けと共に簡易レストランとなり  
あわただしく朝食を提供する  
手慣れた女性従業員たちによって

スーツのボタンを掛けながらエレベーターを降りて来た男  
空いた椅子を見つけカバンを置いて自席を確保  
誰と言葉を交わす必要もなく  
コーヒーはほど良く熱い  
自由に味わえる味噌汁もあって

食堂の隅に淫靡備え付けられたスポーツ新聞や 経済新聞  
そんなものはいらない  
朝のニュースは手元の I T 機器で  
新聞より早く  
瞬く間に  
世界の隅々まで捕らえることができる

経済情報も  
災害情報も  
知らない国の内乱情報も

最近めっきり増えた外国からの観光客  
インターネットの底力  
日本のホテルは狭くても便利  
衛生的  
治安も良い

あやふやと日本語を操る人たち  
自信なさそうに固まって

男たちの居場所がまた一つ  
生き難くなった



五十年來の親しい詩の友人から便りが來た、  
「妻が亡くなりました」と。  
胸がつまった。

友人の心中を思ひ、  
この日頃ずっと心の隅にわだかまつてゐた  
人間の存在そのものの淋しさが  
急に胸の中にひろがつてくるのを感じた。

私もいつかはそうなる。  
私が先か妻が先か。  
いづれにせよ妻も私も  
そんなことはおくびにも出さずに生きてゐる、  
日々の雑事をなんとかこなしながら。

友人の便りを前にして  
私は肌にぢかに感じる事ができる、  
いま私は淋しさの眞つただ中にあるのだと、  
それが私といふものの定めであると。

窓の外は音もなく降りつづく霖雨。  
まるで天が私の心を見透かしてゐるかのやうだ。  
ひよつとしたらこの淋しさは……  
これからも私という存在をずっと  
根もとで支へてくれる友なのかもしれない。

通りがかりの空き地の草むらで  
チロチロと鳴くのは何虫か  
リリーッと鳴くやつもある  
季節が深まり  
寒い風の吹く冬を予感して  
今のうちにと鳴くのか  
背負わされた  
はかない羽をもつものの宿命よ  
この胸に沁み入るすだきを  
誰に聞かすのか  
虫どもに空から落ちて死ぬ悲劇はあるまい  
では買収や賄賂や詐欺はあるのか  
通貨はなくても悪事は出来る  
虫どもの名誉のために  
そんな卑俗な憶測は慎もう  
山に籠った隠者のように  
草むらに潜んで頻りに鳴いて  
青白い月の出でも待っているのか  
声だけの秋の虫たちよ

スーパーマーケットで見かけたひと  
力ない様子で周囲の棚を見やる  
何を探しているのか  
ギクシャクと歩き出す

直線的に細く描いた眉  
左右の形が著しく異なり  
色を選んだであろう口紅は  
大きくはみ出して

それでも胸の大きく開いた  
黒いワンピースが似合う  
若い頃の美貌を思わせる  
白さの多い髪は一つにまとめて

私は見てしまった  
コートポケットに  
おにぎり一つを滑り込ませた  
老女の手元を

人形を思わせるような  
おしゃれなひと  
その美しさが悲しい

春の華やかさを拒むように  
花粉症の季節がやって来た  
憂鬱と痒みの罰を受けるように  
鼻水と涙が待ち伏せしていた

はげ山にした罪を償おうとしても  
おいそれとは許して貰えないのか  
杉の木で植林をして山を緑にしても  
植物とは共生できない前兆だろうか

人間の鼻や眼を攻撃する花粉の弾丸  
植物は何かを守っているに違いない  
旅立つように澄んだ水を憧憬する観念  
山に登るように透明な空気を慈しむ愛

私たちは季節の中でも我が儘になり  
自然とのバランスを忘却していたのだ  
山桜の花々を見ても時代に受動的になり  
人間としての務めを放棄していたのだ

病人になって健康の大切さを知るように  
花粉症は自然から拒まれた自分を知る  
地球上の至る処で共生できるように  
私たちには花粉症が試金石になる



山桜の花々

伝説の最恐ホラーゲーム「サイレン」では  
プレイヤーが 徘徊する敵「屍人」の視界を  
あたかも「電波ジャック」するみたいにジャックして  
そいつが席を外したり よそ見したりしている隙を窺っては  
ごきぶりみたいに こそこそ移動したり  
卑怯にも 後ろからぶん殴ったりする  
暗いゲームだ だが 趣向は斬新だ  
そうだ！ それなら 俺もやってみよう  
えーと それでは始めます 心を集中して  
ザーツ ザーツ...あっ 始まった！  
...うーん でもまだ ホワイトノイズばかりだ  
...いや 待てよ 映った！  
ん？ 何だこれは？...  
あ！ 嫌だなあ 俺の頭じゃん  
何だい 偉そうに 座禅の真似事なんかしちやってさ  
おまけに 年のせいかな いつのまにか  
頭のとっぺんのツムジまで 随分と大きくなっちゃって  
...って いやいや！ そんなことより！  
まずは こいつの「居場所の特定」だ  
この視界の位置は...そう 見え方から逆算するに  
ちょうど「この部屋の天井少し西寄り」辺りか  
それにしても 暇かつ随分物好きなやつだなあ  
わざわざ こんな至近距離から よりによって この俺の  
広がるツムジなんか見てるなんて...誰だろう？  
...はっ！ こりや、も、もしかして...お袋？  
ぐっ...そ、そうだったか  
こないだ皆で三回忌の法要を挙げてから もう一年  
今も こうして この馬鹿息子を 見守ってくれている訳だな  
そして このツムジの成長も...  
そうか ありがとな...よし！ じゃあ お礼に  
これから唱えるよ お念仏  
南無南無...あっ！ 今 俺が光った！ こりや何だ？  
柄にもなく 親の供養なんかしたから  
突然 霊格でも上がったのか？

それとも ただ単に ツムジに  
天上の（或いは わが家の天井らへんの？）  
笑ったお袋が 映ったか？

鶴に逢いたく  
羽田から飛び立った  
幾人かの友人を誘ってみたが  
寒い とか  
遠すぎる とか  
行きたいけど二人で行くことが問題になる とか

ええい 面倒 と  
一人で行くことに決めた  
思い経ってから二、三日目  
晴れた朝のこと

枯木立の上を  
コバルトの空が痛いほどに輝いていた  
鶴は雪野が原に佇んで  
私を受け入れてくれた  
遠くに居ながら  
キタキツネを足元に置いて

静まり返る空間にいて  
存在を知らせる羽ばたき  
次の瞬間には  
鳴き合わせる艶やかな声

私一人が泊まる民宿の窓近くを  
次々と飛んでゆく鶴たち  
一日の糧を求めて

絶滅は繰り返すまいとする  
人間の知恵に救われた  
鶴たち  
今日も朝早くから撒き餌の畑を目指す

ツアー客たちは



突然延長された観光時間を持て余し  
雪の原に置かれた餌自動販売機に  
金を押し込む

時間延長が  
餌販売業者の計略だったとも気付かずに

冬の青空の下に何本もの電線が伸びる  
百ボルトの電気を送るためばかりでない  
電話やケーブルテレビ用のものもある  
電柱から電柱へ伸びて見分けが付かない

嘗ては一本で良かった電線が二本になり  
二本から今では無数の電線が頭上を覆う  
傭兵のように通勤する人には見えなくなり  
いつの間にか日常が電線の風景を見失う

光ファイバーの電線は世界を繋いでいる  
欧米から直接CDも書籍も購入できるのだ  
自宅や事務所の部屋にいても世界が見える  
それでも青空の下では何かが足りないのだ

電線の下を顔を上げて歩いて考えてみる  
昼と夜を見分けて海外の人と会話も出来るが  
創造するプロセスが消え喜びが褪せている  
刹那に流れ行く会話が進行する虚ろな自我

節度を失い混線したような電線は忠告する  
生活が便利になると不幸も多くなるだろう  
溢れる情報の光と影を浴びて思考が停止する  
電線のある風景に見える彷徨した傭兵の不幸



電線のある風景

山に行けば狐が取り憑き  
川で泳げば蛭が吸い付き  
畑の道を歩くと肥溜に墜ちた  
夜は村の外れの松の上に  
人魂が怪しく光った  
面白くもない昔話と嗤うがよい  
いつの世でも取り憑くものはある  
臭いはなくても肥溜以上に  
危険な落とし穴もある  
狐も蛭も肥溜も影を潜めたが  
発熱をして息をする人魂だけは  
仮想の現実とかに取り憑かれ  
忙しく走り回っている  
時代に取り残された男が一人  
遠い田舎に引きこもり  
ある日台所で鉛筆なめなめ  
「買い忘れた物  
うどん ポテトチップス」  
と紙切に書いた

閑話休題。

アダシゴトハサテオキと讀む。

これから本題に入るといふことだ。

今はあまり見ることはないが、

かつては軽い随筆などによく見かけた言葉だ。

人の生涯が自らに強ひた一種の作文だとすれば、

いよいよ生の終盤にさしかかったとき、

人は感じるかもしれない、

あるいは心の中で眩くかもしれない、

——閑話休題、と。

これまで自由氣ままに言ったり書いたりしてきたことは

すべてアダシゴトではなかつたか。

そのことが頭を去らずに、

深夜眠れなくなつたことはないか。

それは日頃よくあるただの後悔ではない。

それは言ひやうのない淋しさの感情だ。

人の生が苦い作文であり、

その殆どが閑話だつたのではないかと感じたとしても、

文中にたやすく閑話休題などと置くことはできない。

そのときの自分にとっては

すべてかけがへのない本題だつた。

小学校で英語の授業をやるらしい  
正しい日本語も左程知らないのに  
小学生は外国語に精を出すらしい  
日本人としての自覚は何も無いのに

英語が分かれば誰でも良いのだろうか  
日本人にますます思慮が無くなれば  
誰が責任をとってくれるのだろうか  
乞食も犯罪者も英語を話す英語の本場

日本人の子供が全員英語を習うなら  
アメリカ人の子供も全員日本語を習い  
お互いの国の言葉を同じ様に習うなら  
国際交流も公正に進展するに違いない

それなのにハンバーグを食べるように  
まるまる言葉をその儘飲み込むだけ  
コカコーラをラッパ飲みするように  
言葉までも体内へ慣性で流し込むだけ

十二歳までは国語で思考を鍛えろと  
嘗て西洋の思想家も認めていたのに  
慣れない英語で井戸端会議を開くと  
ここは思想の無い為政者が蔓延る国

畝るように跳ねるように苦悩の樹は  
律動する彎曲する燭台の炎の暈  
入り乱れた蜥蜴の通路をなぞって  
悦楽の園を模倣しながら反復する天路遍歴  
繰り返される媚薬の鼓動  
足を踏み鳴らして飛鳥に変身する牛や馬  
木霊は返って来るかと秘儀の衣を引いて  
光耀する山吹の躑躅の花弁の破紋  
くねりながら生命の動きを確証する足跡  
何処をどう巡り転生の調律が酌量する  
辿り着いた音符の色の感化の構図  
滅びのままに再生する不死身の花冠  
絶望の言葉を吐く前に槌打つ感覚  
仮面の剥がれ落ちた乱舞の紋章  
反響する連弾の果実は熟れて  
交錯する弧線の脈打つ祝祭  
跳ねて翔んで鹿子の瞳は灯火に陰る  
黒い線の緑青い線が円舞する贖い  
足の運びに手のしなやかさに陶醉する烏瓜  
瞠目する人面が垣間見えて  
夢は完結する  
一気呵成の精神の高揚の気概から  
いつまでも網膜に焼きついた輪舞の宴  
煩悩の嗟嘆が快活に意志を導き出す時  
理由のない不安の懶惰の窮迫から  
思想の煌めき燦きは墓穴を掘るように鍬を取る  
乱舞せよいつまでも  
永遠という牢獄の壁を星辰は蹴り破る  
踊り疲れることはあるだろうか  
醇乎とした運命の筋書きを踊り続ける埋火

(ジャクソン・ポロックの画より)

弟が  
ガツン！と  
姉をぶつ。

姉は  
構わず  
絵を描き続ける。

五歳と二歳。  
このきょうだいの  
青春を  
じいじは空想する。

髪も  
顔つきも  
三角に尖らせて  
弟は  
黒くてとっても大きな何かを  
ガツン！と  
殴りつける  
勇敢に。

花園を  
襲う  
嵐に耐え抜いて  
姉は  
脆くてとっても小さな何かを  
空へと  
育て上げる  
耀やかに。

そのとき  
二人のそばにはもういない  
じいじ自身を



じいじは空想する。

おいで！

じいじは呼びかける

今ならまだ

じいじは

二人のそばにいてやれる。

動物園へ

動物園なんて何年ぶりの事  
下の子の幼稚園以来だねえ  
大人だけでそんなところに行くなんて知らなかった  
しかも最近ではそんなグループが多いなんてことも

今日はお天気が少し悪いけど寒くないだけまし  
お昼はどこかで食べよう  
自分のためのお弁当なんて作りたくもないよね  
今まで子供たちのために作ってはきたけどさ  
お茶だってそこらへんで買えばいいよ

始発駅近くから乗ったから  
皆で並んで優先席に座れた  
おしゃべりが盛り上がる

入園料は高齢者割引で半額  
得した気分  
一人がソフトクリームを買ったので  
皆も買って それを食べながら歩いた  
一人がおせんべいをくれたので  
それも食べながら歩いた  
喉が渴いたし お昼時間になったので  
レストランに入った

お店に落ち着いたら  
誰かが腰が痛いと言い始めて  
どこの病院へ行ってるの  
そこでどうしたの  
いつもの病気話が終わらないで  
そのままレストランでしゃべってた

そろそろ帰ろうか寒くなってきたしね  
今夜の夕飯どうするの

駅前のスーパーで何か買ってく  
お刺身でも買って行くかな

動物園には何がいたっけ？  
何を見た？

また行こうね

宮の平から山路を登って  
谷間の石灰工場の廃墟に深閑  
とした戻らぬ時の影を眺めてからは  
「私」という奴は何を見ていたのか  
寒くて鳥の声も木陰に聞こえず  
空は青い晴れでも  
景色は遠くぼやけていたから  
巡りの悪い頭の中は一層ぼけて  
青梅に降るつもりがとうとう  
河辺近くまで行ってしまった  
それより驚いたことは  
家に還って机の上にある  
貰ったばかりの本の表紙の  
写真の横に「ノルウェイの蓄音器」  
という小さな文字を眼にしたことだ  
若い男が女の肩に手をかけて  
煉瓦の道を歩いているのだが  
蓄音器は何処にも写っていない  
どうして若者達が蓄音器であるのか  
基よりこの錯誤に罪はない  
アア「私」は遂に  
真実を作る機械が錆びて  
操業を止めるしかない  
屋根の破れたおんぼろ工場なのだ

日は午後の日差しを射しかけ  
歩く人の影がくっきりと落ち  
高い大きな塔は片影を陰らせ  
屋上の端に五本の旗が風に泳いでいた

舗道は日照りに明るく反映して  
時は追憶を路上に浮かべていた

人影は幾万年も動こうとしない

塔は不動の構えで聳えたっていた

影をなぞっている高い門柱の館

懐かしさが渴いている

予言者は去って行った

館の影は石像を彫る

いつまでも鐘の音は鳴り続けて

二人の影は沈黙して止まっている

誰の声も聞こえない

暦日は巡り

夢のかけらが塔の窓から零れ落ちた

日の光は影を引きながら西へと向う  
二人の人影がふと吐息を漏らしていた

四年前に八五歳で亡くなった母の名前で  
重く厚い封筒のダイレクトメールが届いた  
開けると国内や海外の旅に誘っているので  
旅行会社の豪華な冊子が奇妙に感じられた

四年前に独り冥土の旅へ出発したのに  
今も主のいない旅行カバンが孤独でいる  
この世に未だ行きたい所があったように  
分厚い冊子が色々な名勝地へ誘っている

そう言えば生前の母は旅行好きだった  
息子の私が知らないうちに海外旅行から  
帰ってきた時にはびっくりしたものだった  
心配でないのは双子の姉が一緒だったから

今でも思い出すのは遠いスペインの旅先で  
知り合いになった女性が郵送してくれた写真  
写っていた女性の顔が妻の友だちだったので  
母も妻も私も驚きながらも狭い地球を実感

日本では鬼籍に入った人の生きた証しを  
特定して自由に調べられるのだろうかと思う  
生きていた時の死者の優しさや美しい息吹を  
その儘ダイレクトメールのように実感しよう！

おかしな言い方になるが、今頃になってやっとその本を読むことが出来た。特に読まなくてはならぬ本ではないかも知れないが、と言って読まずに済ましてもよい、とは簡単に言えない日くつきの本として、私の意識の奥に長く留まっていたのである。それがようやく手に入ったのは偶然であった。知人の一人がその本を持っていたのである。それで私は念願の本を読む幸運を得たのであった。それは小説や詩集の類ではなく、往時の日本の知識人を代表すると言ってもよい十三名による座談会での発言を記録したもので、題して、『近代の超克』。その大方の人の論文も収録したものだ。座談会の出席者は次の通りであった。

「西谷啓治、菊池正士、小林秀雄、三好達治、諸井三郎、下村寅太郎、亀井勝一郎、津村秀夫、河上徹太郎、鈴木成高、吉満義彦、林房雄、中村光夫」

この座談会は昭和十七年七月二十三、二十四の両日にわたって行われた、あまり例のない長時間を費やした催しであった。平成の今日から見ると随分昔のことで、戦後生れの人には読んでもぴんと来ない内容かも知れない。昭和十七年七月というのは、その前年の十二月八日の日米開戦から半年余り経過した頃で、「鬼畜米英撃滅」の標語が巷に溢れていたのではなかったろうか。国を挙げて戦争に勝つことに専念するのは当然のことであるが、この座談会もそういう趣旨に沿って開かれたと言うしかないようである。しかし無惨なことに、この座談会の少し前の六月五日に、大日本帝国海軍の連合艦隊はミッドウェイ海戦で米軍機の攻撃によって壊滅的損害を蒙り、それを機に戦局は我が方に著しく不利に傾き始めたのであった。それを知っているのか、或は知らぬが仏の振りをしていたのか、出席者の発言は音程に強弱の差はあるものの、日本精神とか大和魂なるものを戦争遂行に最も重要なものとして賞揚するのである。戦争は国を挙げての総力戦であるから、戦場でない銃後と称する国内にあっても、それ相当の覚悟が要求されるわけである。座談会の出席者は優秀な知識人であるが、論客として見ても、その舌鋒はしたたかである。

当時の世間の標語の一つに「滅私奉公」というのがあったが、出席者の一人で、京大哲学科出身の学者西谷啓治の論文『「近代の超克」私論』の中にこんな一節がある。

「吾吾は一個の国民として生活している。然も国家は個人の恣意的な自由を抑圧せねばならぬ。これは国家の存立にとって不可避の要請である。そこから西洋近世に於ける、個人と国家との間の深い困難が生じたのであった。然も現在では国家はこの要請に於て徹底的であることを迫られている。即ち滅私奉公ということが強調される所以である。各人はその職域に於ける務めに於て滅私に努めねばならぬ」

西谷の文章はこの論調で終始するが、この一節からだけでも、その背後に巨大な影のように動く時勢というものが感じられる。感じられるというのは、もちろん私自身の認識であって、戦争の時代を知らない世代には感じる事の出来ないところかも知れない。私事になるが、昭和十七年と言えば私は中学五年生で、而も文化果つる僻地と自嘲する者すらあったほどの遠隔の地に棲息する少年であって、こんな座談会のあったことなど知る由もないのだが、既に「滅私奉公」の時代の中にいたことは確かで、恣意的自由どころではなかったのである。平成の現在では、所有

する生活用品の処分に困るほどに恵まれた日常がある。恣意的自由の恩恵と言うべきであろうか。「近代の超克」が議論される昭和十七年では、物は求めても求めても無かった。「求めよ、さらば与えられん」とは西洋の思想らしいが、どうも当時の日本ではどんなに努力しても到達出来そうにない文言であった。中学二年生の頃には、学生服を作るのにも木綿の生地がなくて、スフで間に合わせるしかなかった。スフはステーブル・ファイバーの略で人絹（人造絹糸の略）のことである。派手に光る布地で、着るとぴらぴらだらしなく揺れる代物であった。物資の払底はそれだけではない。靴下も買えなかった。靴下どころか、下着のランニング・シャツもパンツも買えなかった。商店にないのである。他は推して知るべしで、学生服のことを続けると、その生地は最後は桑の木の皮の繊維で作ったもので、目の粗いドンゴロスに似ていた。ドンゴロスというのは、大豆やトウモロコシのような穀物を容れる袋である。そんな学生服を着て当時の田舎の中学生は、近い将来に備えて軍事教練を受けていたのであった。学校では時々、抜打的に服装検査があった。隠れて煙草を吸う者があるので、それを調べるためである。生徒たちは校庭で一列横隊に並び、全員が上着を脱ぐ。見ると、シャツを着ている者は殆どいない。つまり、上半身裸体というわけである。真冬でも同じであった。これこそ正に西谷啓治が推奨する「滅私奉公」の典型的な少年の姿である。

日本を代表するような秀れた知識人の論文から、私自身の哀れな身上話のようなところに迷い込んだが、元に戻る前に突然ではあるが、行きがかり上、戦争についての稚拙な私見を少しばかり述べさせて頂きたい。

戦争は相撲をとったり、駆けっこをして勝負を争うイベントではない。殺人と破壊の競争が、昔から戦争の特徴であった。その戦争は何故起るのか。周知の如く、国家間の利害の衝突が戦争に発展するのである。実はその利害なるものが曲ものなのだ、利害は戦争の口実に使われる理由である。国と国が外交交渉の形をとって談判を行い、それで利害の解決がつかなければ、武力を使って雌雄を決するしかないのが戦争の歴史である。従ってこの場合は戦端を開くに当って、厳かに宣戦布告をするのが近代に於ける世界的な慣習であった。ところが、宣戦布告なしの戦争というものがある。満州事変とか支那事変といった戦争がそれであった。これは政治上の談判の決裂によって始まった戦争ではない。国境を接する相手国の兵士が発砲したから止むを得ず応戦したと称し、それを切っ掛けに戦争を始めるのである。しかし、事変は全面的戦争ではないから、戦線不拡大が建前で、それに従えば事は治まる。ところが、建前と本音は違い、戦線は拡大されるばかりで、昭和十二年に始まった支那事変に至っては、日米開戦の昭和十六年十二月まででも五年の歳月が流れているのである。「天に代りて不義を撃つ」で始まる歌に送られて出征兵士は大陸へ渡った。私は今でも「天に代りて不義を撃つ」の後の歌詞をうろ覚えながら思い出すことが出来る。

忠勇無双の我が兵は  
歓呼の声に送られて  
今ぞ出で立つ父母の国  
勝たずば生きて帰らじと  
誓う心の勇ましき

壮丁を急ぎ立てて戦場へ送る無惨な歌で、日露戦争の時に与謝野晶子が、



旅順の城は落ちずとも

君、死に給ふことなかれ

と詠んだのに比べると、時勢の著しい変遷が見てとれる。

一体、支那事変とは何であったのか。後になって日中戦争と名称の変更があったが、戦争なら宣戦布告するのが世界の慣例であるのに、この国は頬被りをしたまま中国に大部隊を投入して占領地域を拡大して行ったのである。話は飛ぶが、遠い昔、我が国へ蒙古軍の襲来があった。日本を征服するためであった。文永・弘安の二度にわたる侵攻である。当時としては希に見る外国との大戦争である。文永の時は蒙古軍は九州に上陸しており、戦況は我が方に不利であった。ところが周知のように、かの有名な神風が吹いて敵の軍船は壊滅したのである。弘安の役の時も神風が吹き、蒙古王フビライの野望は敢えなく潰えたのであった。勿論蒙古は今の中国ではない。ところが面白いことに、文永の役に先立って、蒙古王から日本国王に国書が来て、その中に「冀くば今より以往、通問して好を結び、以って相親睦せんことを。且、聖人は四海を以って家となる。相通好せざるは豈一家の理ならんや。兵を用うるに至る、それ孰んぞ好むところならん」というところがあり、私の持つ歴史書の著者は「四海を以って家となす」という字句を取り上げ「まさにかの「八紘一字」すなわち「八紘を一つの字となす」という言葉の意味とそっくりである。ともに淵源は中国古代専制帝国の世界支配の思想にもとづくもので、それだけにそれを近隣の国へ押しつけるやりかたもまた同じであった」と解説しているが、文永・弘安から遙かに隔たる昭和十年代になって、中国古代帝国の世界支配の思想を踏襲したかに見える「大東亜共栄圏」構想に想起してのことか、歴史家は「「大東亜共栄圏」に入りたいとおもう諸国に「親睦」と「友好」を要求し、まさに「兵を用ふるに至る、それ孰んぞ好むところならん」という尊大な態度をとったこともいまになまなましい記憶である」と述懐する。

この「大東亜共栄圏」というのは、いつ頃浮上してきた構想なのだろうか。歴史書で見ると、首相近衛文麿の「新体制確立のために微力を捧げたい」という声明が昭和十五年六月二十四日に出されているから、共栄圏構想が具体化するのはその後だが、共栄圏に「大東亜」を冠したのは、米英に仕掛けた戦争を「大東亜戦争」と呼称したことで誰にでも解ろう。歴史書には十七年五月のことだが、「主催海軍協会・朝日新聞社」「後援海軍省・情報局」で、「大東亜戦争展覧会」をデパートで開催するという広告が載せてある。更に年表には同年「十一月一日 拓務省を廃止し、大東亜省を設置す」とある。

これで新体制は出来たというわけだが、共栄圏構想を想定する下地は満州国建設の際に透けて見えているのではあるまいか。「王道楽土」という歌い文句が建国を飾る幻想であった。建国の前段の満州事変は昭和六年。その六年後には支那事変である。いずれも満州に本拠を置く帝国陸軍の精鋭関東軍主導の軍事作戦であった。後者も中国に新しい国家を建設するための戦争で、今でも覚えているが、王兆銘政府の樹立があった。とって、それは中国全土を支配する政権ではない。中国大陸には蒋介石の国民軍と毛沢東の中共軍がいて日本軍に抵抗し、容易に降参することはなかった。日毎の戦線の拡大で我が軍の弾薬、糧秣の補給はままならず、戦争はだらだらと長引くだけであった。負けているわけではないのに、何となく糞づまりのようなすっきりしない戦況を打開するかの如く、十六年十二月八日、リメンバー・パール・ハーバーでお馴染みの、帝

国海軍航空隊によるハワイ真珠湾奇襲で幕を開けるアメリカを中心とする連合国との戦争が始まったのである。

この時の強い衝撃を国民はどう受けとめたであろうか。「近代の超克」と無関係とは言えない当時の識者の発言が、「日本の歴史25太平洋戦争」（中央公論社）に出ているので、同時代の空気を吸っていたためもあって、なんとなく自分の古傷に触るように後ろめたさはあるが、敢えて引用しよう。

「あの十二月八日の朝、感じたことを一言で言いますと、ざまあーみろです」（辰野隆）

「生きているうちにまだこんな嬉しい、こんな痛快な、こんなめでたい日に遭えるとは思わなかった。この数日と言わず、この一、二年と言わず、我等の頭の上に暗雲のごとくおおいかぶさっていた重苦しい憂うつは十二月八日の大詔渙発とともに雲散霧消した」（長与善郎）

「戦勝のニュースに胸轟くを覚える。何という巨きな構想・構図であろう。アメリカやイギリスが急に小さく見えて来た。われわれのように絶対信頼できる皇軍を持つた国民は幸せだ」（青野季吉）

「戦争より恐ろしいのは平和である。……奴隷の平和より戦争を！」（亀井勝一郎）

「何なれや心おごれる老大の 耄碌国を撃ちてしやまむ」（斎藤茂吉）

世の識者にしてかくの如しの感激だから、他は推して知るべしである。私自身は山陰の僻地の我が家のラジオで、大本営発表のニュースを聞いたのだが、それにどのように反応したのかは全く覚えていない。軍国少年であった者が何も感じないわけではないのだが、何一つ書き残していないので、興奮だの感激については言いようがないのである。歴史書に名を挙げられた人たちは既に著名な知識人であった。真珠湾攻撃が失敗に終わっていたら、このような感慨が口から出るわけではないが、何せこの攻撃は歴史的な大勝利である。戦術的には不意討で、アメリカは寝首をかかれたのである。昔の武士のように、「やあやあ、我こそは何某なるぞ」と大音声を張り上げて戦いを挑んだのではなく、黙って闇討の拳に出たというわけである。しかし大勝利の発表を聞けば、手段はどうであれ、国を挙げての戦争なのだから、百パーセントと行かないまでも、国民は大いに興奮し感激する。それで国民感情に勢いがつくから、八紘一字の旗の下に大東亜共栄圏構想が具体化するのである。それはアジアから西洋の勢力を排除することであった。つまり、米英を鬼畜の国と位置づけて、それを撃滅する強い精神力の涵養を図らねばならない。日本精神、大和魂の発揚である。それには大東亜戦争が正義の戦い、即ち聖戦であることを国民の心に叩き込まなければならない。つまり洗脳である。「我々は侵略戦争を開始する」と宣言する国は何処にもあるまい。昔話の桃太郎と同じで、悪者を退治するために兵を出すと言わなければ国民は勿論、世界だって承知すまい。聖戦の理論づけが肝腎で、そのために哲学者、宗教家、文学者といった知識人を動員して万遺憾なきを期さなくてはならないのである。そういう構想の地平に現れたのが、「近代の超克」と名付けられた蜃気楼のような座談会であった。（つづく）

先程日米開戦の衝撃を受けとめて発した識者の言葉の中に、「戦争より恐ろしいのは平和である。・・奴隷の平和より戦争を！」というのがあった。亀井勝一郎のものだ。問題の「近代の超克」座談会のメンバーの中で、亀井は最もはっきりした戦争支持者である。勿論、そこに集まった知識人に反戦平和を唱えそうな者は、その発言を聞く限り一人もいない。論文の方を讀んでみると、内容は今日でも成程と炯眼の感じられる秀れた文明批評を展開しながら、結びになると戦争賛成の論調に変節するのである。尤も、林房雄のように初めから終りまで時局に迎合同調しているとしか考えられない論文を書いている者もあるのだが、亀井の場合はその論文のある部分は流石と思わせるところがある。将来を見据えての文明の現状を鋭く批判していると見えるからだ。ところが結語に至ると、何故か取って付けたように著しい変節に陥るのである。

亀井が座談会に先立って書いた論文「現代精神に関する覚書」の末尾は、日米開戦の日に発したあの表明と重なるのだが、鼻屑をして弁護しようにも仕様のない好戦論者の血の流れを感じざるを得ない程のものである。

「戦争より恐ろしいのは平和である。平和のための戦争とは悪い洒落にすぎない。今次の戦乱は、かの深淵の戦争のための戦争であつて、この戦場において一切の妄想を斥ける明晰さと恐れを知らぬ不拔の信念とが民族の興廃を決するであらう。奴隷の平和よりも王者の戦争を！こゝでの勝利は、勝利といふ観念では存在しない。悲願あるのみ」

この論文は五章から成っており、その第三章の「感受性の頽廃について」を見ると、そこには平成の現在と少しも変わらぬ状況がある。「たとへば戦場における崇高な行為が、ひとたびジャーナリズム化され、乃至はラジオや映画や浪花節となつた場合を考へてみれば、瞭然とするだらう。私はこの伝播のあまりに迅速なのに驚くのである。——崇高な行為がある——写真班がかけつける——ラジオで放送する——新聞に出る——讃詞を書く——映画になる——そして忘れる——これが非常な速度で行はれ、崇高な行為に内在するすべての陰影や繊細な抒情を悉く打ち捨ててしまふ。しかも形だけは微に入り細を穿つて拡大され、同一調子で反復される」

このあと亀井は具体例を挙げて論を進め、「感受性のかかる頽敗に、更に拍車をかけるものとして私は映画と写真術の進歩をあげたい」と言つておいて、次のように結論付ける。

「何事に対しても見境なく之を写すといふ、無邪気極まる犯罪の重大さを知らないのだ。何か珍しいもの、美しいもの、尊いものがあればすぐカメラを向ける。写して然るべきものと、然らざるものとの区別がつかぬのである。たとへば大和の古仏や美術品を映画化することに私はいつも疑問をもつ。古びた御堂の、幽暗の裡においてこそ光りを放つ古仏を、映画で露骨化し、こうして普及するのが、国民の美意識を高める所以だと考へるのは果たしてノーマルであるか。言葉の場合にひとしく、ここにも俗化して平均化するといふ傾向は顕著なのである。逆に観客の方は、まさに物体が正確に写されているといふ信頼のもとに、その深奥に陰影する情緒が失われてゐるといふ驚くべき不正確を見失ふのである。不正確を、形の正確さによつて隠蔽し、たしかに正確なものを見たといふ錯覚をもたらす——しかも面白がらせながら、かうして人間の感受性は見事に麻痺状態におちいるのである」

このような批評精神を持った文芸評論家が、「戦争より恐ろしいのは平和である」との給うのだから、御高説を聞く方の頭は混乱するのである。彼の有名な詩人萩原朔太郎の言う「反語」な

ら納得できるのだが、結論の前にある数行を見る限り、それには逆説のニュアンスが少しも感じられない。

「殆んど自然的の強制力をもつて襲ひかゝってくる文明の重圧、機械主義、それがもたらす精神のすべての疾病や衰弱、節度を失つた人間の自壊作用、滅びるか、なほ救済はあるか、これは、今次の世界大戦のもう一つ奥にひそむ戦争である。眼前の戦争の勝利によつてこの深淵の戦ひに空想的になつてはなるまい。しかし勝利者が屢々抱きやすい「平和」といふ妄想は、この深淵の戦ひを糊塗する。人は「平和」の観念によつてこの戦ひに敗北してきた。近代日本の、たとえば自由主義と呼ばれ共産主義・唯物思想といはれたものは、悉く「平和」の時代に瀰漫したことは注目すべきだ。文明の毒は「平和」の仮面のもとにはびこるのである」

解りにくい文章で、「今次の世界大戦のもう一つ奥にひそむ戦争」だの、「深淵の戦ひ」などと言われると、なんとなく神がかり的呪文を聞かされているような気分になる。保田與重郎と同じ日本浪漫派だから、その気があつても何らおかしくはない。

それより亀井が槍玉に挙げた映画の分野からは津村秀夫が「近代の超克」座談会に加わっていて、頭脳明晰を感じさせる論文も書いているのである。詩人津村信夫の兄だ。その論題は「何を破るべきか」で、A・B・C・Dの四人の人物に発言させる形を取つたものである。津村の肩書を見ると、「朝日新聞記者。文部省専門委員」とある。論文の中から、文明批評としてこれとは言える面白そうなところを取り出してみよう。

「・・・B君もいはれるやうに日本自体の問題としてはこの東西文化圏の連関と協力をどうするかは甚だ重大と考へます。といふのは、日本文化がその伝統精神を喪失せずに生きて来たと同時に、近代精神に貫かれた古いヨオロッパ文化とアメリカの物質文明とを多量に吸収して来たからであります。当今でも文化といふ言葉は甚だ安直に使われ、又は奇怪な方法で使用されてみまますが、大正時代には文化住宅などはまだよい方で文化ドンブリ、文化サルマタ、文化コンロなどといふ言葉が流行した。あの現象を以てしても、如何に日本がアメリカ物質文明の悪影響を受けたかは明瞭である。僕はアメリカニズムの影響と見る。僕はなるべく卑近な例証を引きたい。文化といふ問題は単に学問、芸術、思想、発明などの高尚な問題ばかりの首根っ子を捉えてひねくり廻しても始まらぬと思ふ。僕は、文化サルマタと同時に当今流行する何何文化協会といつた名前の文化という言葉の流行現象にも甚だ興味を持つし、同時にフィリッピンその他の外国運動選手のサインを貰うために狂奔した曾ての都会女学生風俗をも重視するものであります。ディアナ・ダアビンやタイロン・パウアの写真が現代東京の喫茶店や美容院の壁間に未だにペタペタと麗々しく飾られながら、誰もふしぎに思わないといふ現象をも、矢張り日本文化のためには重視するものであります。浅草の女剣劇芝居に熱狂する大衆も、アキレタ・ボーイズなどといふ完全なアメリカニズムの狂騒的アトラクションの流行したことや、「女系図」などといふ安手の映画を見て泉鏡花を理解したやうな気持になつて陶然としたり、逆上したりする青年男女の大群をも重視する。ブルース調はレコード界を風靡したが、「湖畔の宿」といふやうなブルース調の虫唾の走る流行歌が未だに盛大に歓迎されてゐる現象を諸君は知つていますか。要するにさういふ卑俗なものには一切目をつぶつて日本文化を論ずるといふ風な現代文化人の議論の仕方の方が問題である。さういふ文化人をこそ寧ろ現代日本文化の問題として論じたいのであります」

Aの論ずるところはアメリカニズムに焦点が置かれているのだが、戦争相手の敵国のことだから当然ではある。戦場の将兵でない者は文化文明の分野でアメリカニズムを排除して、本来の日

本を取り戻さなくてはならない、というのが「近代の超克」に盛り込まれている論旨であることは、これだけの文面からでも判る。平成の現在では、結果でものを言うしかないものの、戦後の我が瑞穂の国が影響を受けているアメリカニズムは、大正から昭和十年代にかけて受けたそれに比べると、そこに雲泥の差のあることは、ここで述べるまでもあるまい。しかし時局に沿った論考としては、矢張り現在との比較から、肝に銘じるといふ意味合いで読み直すだけの価値はありそうである。Aに託した津村秀夫の言葉の主要なところを出そう。

「アメリカニズムはなるほど現代文明として吸収せねばならぬ価値を持つてゐた。電燈もラジオも映画も無電もそうであるといつた塩梅である。けれども大正以後はそれらの文明の利器に伴ふ生活様式を輸入し、さうして次第にその生活風俗の伝染にまで犯されて来たのである。芸術に例をとれば、トルストイやストリントベリイやドストエフスキイはなるほど近代精神として存分に吸収したかも知れぬが、昭和時代の学生層の大半はもうさういふ精神に魅力を感じなくなつてゐるのである。寧ろ彼等は欧米映画に魅力を感じてゐたといつてよかろう。中にはアメリカ映画の「罪と罰」や「復活」をみて、トルストイやドストエフスキイを諒解したつもりになつてゐる青年も頗る多いといふ浅墓な有様である。つまり、現代文化評論家はもう少しアメリカニズムの影響を重視せねばならぬと同時に、アメリカニズムが将来の東亜文化圏の建設にあつて如何に見えざる障害となるかについても想いを致さねばならないと主張するのであります」

うんざりするほど「アメリカニズム」が目の前をよぎるが、私は残念ながら津村が引合いに出している昭和の学生なるものも、外国映画もこの目で見ていないのものを言い難いのだが、私は津村がこの論文を書いた頃は田舎の中学生で、トルストイやドストエフスキイとは無縁であつたと言つてよい。田舎にも映画館はあつたが、たとえそこで欧米の映画が上映されるとしても、映画を見ることは学校が禁じていたので見に行くことは出来なかつた。津村は大都會の話をしているのである。

「ラジオという文明の利器はアメリカニズムであるが、これをナチ・ドイツは如何に活用したか。といふことはつまり如何にラジオと闘争したかといふことになると思ふ。世界で最もラジオの発達した国はアメリカであらうが、次いで普及してゐるのはドイツでありませう。ナチ・ドイツはある思想のために、民族の生死の関頭に立つてこそこれを活用したのであつて、その使用目的は全く異つてゐたのである。一種のアメリカニズムである映画といふものの使用方法も、アメリカとナチ・ドイツでは全く違つてゐる。これは文明の利器に対抗する精神の抵抗であつて、この闘争力がないと現代人は文明の利器に食はれて亡びて終ふのであります。そうです。食はれて終ふという言葉が適切だと思ひます。当のアメリカなどですら、自分が生み出した数々の利器によつて大いに食はれてゐるやうに思はれる。映画といふ文明の利器それ自体は現代に必須のものであり、アメリカの生んだ人間の生活様式の一つとしてラジオと共に重大なものであらうが、併しこれを人間生活、国民生活の中に採入れる方策を一步誤ると鮮やかにアメリカニズムの魔薬にしてやられる。今日まで世界各地で大分シテやられた国々があります」

この論調を辿つていて不思議なのは、古臭くて鼻もちならぬという気が起らないことである。今現在、こんな論調で文章を書けば、反米的と論難する向きもあらうが、文明論としては大体において首肯できよう。映画だのラジオを、テレビ、ケイタイ、インターネットなどという最新の文明の利器に置き換えれば十分に通用する議論であること位は皆さんに解ることだ。ただ一つだけ大きな違いがあるのは、原子力発電という最も危険の大きい運命の利器である。アメリカニズ

ムをアジアから追い出すために大東亜共栄圏の建設を夢見て失敗した日本国は、戦前以上にアメリカニズムを受け入れて、原子力発電所を数多く建設したのであった。ミイラ取りがミイラになった皮肉を歴史的経過の中に感じざるを得ないが、平成の現在、今一度「近代の超克」座談会を開催したら、津村秀夫は一段と声張り上げてアメリカニズム反対を叫ぶに違いないが、ともあれ七十年以上も前の当人の所論の続きを参考のために掲げよう。

「僕は東亜新文化圏の建設という課題について、このアメリカニズムを軽視するなどいひましたが、同時にこれは新欧州の問題でもあり得ると思ふ。新文化の創造といふことのためには近代精神の超克も必須ではあらうが、アメリカニズムといふか、その物質文明力といふか、これの超克についても等閑に附し得ないと思ふのであります。さうして、新欧州文化圏と新東亜文化圏の建設の間に若し共通なものがあり、連関があるとすれば、その重大な一つのもはこのアメリカニズムを如何に克服するかといふ課題に在ると思ふのであります」

なんとかの一つ覚えのように、最後までアメリカニズムが付き纏ものの、それが議論の骨子だから、それを外せば超克すべきものは、無くなってしまうのである。このなんとかの一つ覚えというのは、人間にとって議論する上で強力な武器なのである。それは信念から――植えつけられた信念から出て来るものだ。例として「必勝の信念」があるが、これは戦争遂行には最も大切な精神であった。私の記憶には、ポツダム宣言の受諾で無条件降伏がはっきりしているのに、敗戦の認識が出来なかった者がある。中学の同級生で、陸軍士官学校在学中に敗戦を迎え、その後高等師範学校に入学したが、下宿をしている私を訪ねて来た時、「日本は絶対に戦争に負けていない」と頑固に言い張ったものだ。これは思い込んだら命がけになる狂信的単細胞と言われそうな人間だが、そこへ行くと津村は情報収集機関の新聞社にいただけあって、世界情勢には一般とは違い、それなりに通じており、Bなる人物を登場させて、今次の戦争に「理想」という修辞の化粧を施すのである。その部分を抜書きしよう。

「ただ今次大戦で本質的に異なるのは彼らの敵たる枢軸側の理想主義であります。私は日、独、伊の今次の戦争意志を世界史的な理想主義と呼んで憚らぬと思ふのであります。理想主義といふのは何も文学や哲学に冠する形容詞とは限らないのであつて、人類の理想主義を貫徹することである。かういふ悲惨、醜悪な世界相に直面して日、独、伊が蹶起したのが、今回の空前の理想主義戦争であると私は考へてゐる。どういふ莫大な犠牲を忍び、どういふ遠大な新世界構成の抱負を持つかといふことを考へれば、これを理想主義戦争と呼ばないで何んと呼ぶか。この三国の意志は決して第一次大戦当時の英、米の如く国際連盟と戦債で片をつけようなどといふ生ぬるい御体裁のものではあるまい。たとひ武力戦が十年ですんでも、英、米が数百年かかって築いた世界的基盤や十九世紀からの伝統を持つ共産主義思想といふものを覆滅して新世界を構成するのに九十年で事済めば早い方である。戦後にドルとポンドの威力を砕くのに、英語文化を砕くのに甚だ忍耐力を要する。経済戦と文化戦で九十年はたっぷりかかるといつてもよいので、百年戦争といつてもよいことになるかも知れぬ。決して言葉の綾でも何んでもないと解釈してゐます」

今次大戦を「理想主義戦争」とは、よくもこじ付けたものである。尤も、当時はこういう論調が堂々と罷り通つたのである。国を挙げての聖戦である以上、あらゆる言論で戦意高揚を図るのは当然の成行きであつた。新世界、つまり大東亜共栄圏実現に九十年だの百年の歳月を想定する何とも気の長い構想である。事實は九十年どころか、真珠湾攻撃から四年も経たぬうちに、この遠大な構想は敢えなく頓挫してしまつたので、ここにあるBの演説的議論も今や形なしで、笑う

に笑えぬ昔話である。しかしBは大東亜戦争を美化しているものの、あるところでは平成の現在を見通しているかのような卓見も披露するのである。それをお目につけよう。（つづく）

ものを書く場合、世間を気にしない人はあるまいが、一番気になるのは人体の下半身の或る部分について書く時ではないだろうか。私は偉い人でもこんな事を書くのか、と些か戸惑いながらその文章を先日面白く読んだ。書き方をよく心得ている人であった。

「氏子の特徴」という表題で、作者は柳田国男である。この人の閲歴は知る人ぞ知る所謂エリート官僚で、最後の役職は貴族院書記官長であった。それのみか敗戦後の昭和二十一年には時の首相吉田茂に請われて樞密顧問官になった人でもある。もう一つ肩書を付ければ、民俗学界の第一人者であった。今さっき「書き方をよく心得ている人」と言ったが、この「氏子の特徴」は原稿用紙にして僅か三枚足らずの文章で、そこに心得の所以があると言える。

冒頭に著名な国文学者折口信夫の名が現れるから、どんな議論の展開になるかと思ったら、「折口君の三郷巷談の中に、大阪平野町御霊神社の氏子、男の徴の尖が曲がって居る、其理由は不明云々」とあった。平成の現代人なら「男の徴」などと比喩的な修辞は採用しないで、素直に「ペニス」とでも表現することであろう。そこに生い立ちの違いがあると言うべきか。

問題は「曲り」の拠ってきたる所である。その原因は神様同士の喧嘩の結果にあった。民俗学の先生として柳田はそれを自分自身にまで事寄せて、こんな風に解明するのである。

「自分は今までに此例を二つ三つ聞いて居るのみならず、打明けた処が自身亦其特徴ある氏子の一人である。中国の某県とだけで御免を蒙って置こう」とあるが、何せ隠し所の話だから某県としてあるものの、それが著者の生国であることは訳なく知れる。

「中央部を流れる一つの川の東に氏神の鎮座したまう小山がある。昔此神は対岸の山崎と云う処の氏神と喧嘩をして礫の投合をせられた。相手の神はたしか石が眼に当たったとかで、今でも山崎の者に片目が多いと云ったと記憶する。此方の神には小石が妙な処に当って、其物の尖を傷けた（神にも此物あるは注意すべきことだ）。故に我々の物の頭は必ず曲って居る云々。此が自分の村の口碑である」

私も隣接する中国某県の出身だが、私の所には一つの川を挟んで氏神が喧嘩をしたという伝説はない。有るのは私の子供の頃に、対岸の村と私の住む村とが水利を巡って、石を投げ合う喧嘩をしたという事実である。その事件で頭に石が当り、包帯をぐるぐる巻きにした者のあったことを覚えている。先生の仰る「物の頭」をやられたという話はなかった。やはり神様の喧嘩でないと、話は続かないのである。括弧付きで、神にも此物あるは注意すべきことだ、とあるが、人間は神に似せて作られたという説を信用すれば、神にも人間と同じ物があるのは怪しむに足りない。

さて、問題は次である。「自分は茲に匿名ながら誠実に言明する」と先生は告白的に見える述懐を始める。

「少なくとも氏子の一人たる自分には評判の特徴はない。併し自分の近頃の発明では、男の徴は見ように由っては皆曲って居るとも言い得る。彼一物の一旦大きくなったのが収縮する際には必ず左右に曲りつつ小さくなるのである。此中途の状況を自ら目撃した者が、成程そうだと速断し



たのではあるまいか。比較研究の困難なる社会現象にはよく此類の誤謬がある」

これは確かに比較研究の困難な現象の一つである。しかし、困難だからこそ研究に値するのだと言ったら、それに良い反響は無いことであろう。誤謬という一語が言い当てている。それでもこの先生は、「自分の近頃の発明」の続きとして、何となく諧謔の気味を含ませながら、男の徴の隣に居る物に言及するのである。

「又同じ物の近傍に在る袋の中の二つの球が、一方は高く一方は低いのも、屢々或村の住民の特色のように言うが、此も天然普通の生理状態で、万人の身の中に常に起る居ることであるものを、自分等ばかりと考えたものかと思う」

内容的には馬鹿げている話だが、氏神の喧嘩で一方は石が眼に当たったので氏子に片目が多いと言われ、相手の氏神は局所に石が当たって傷ついたので、氏子の物の頭が曲って居ると言われている。それぞれの氏神の怪我の結果が氏子の特色として周辺一帯に広まるのである。片目の場合はともかく、隠し所に石の当たった神の氏子の物の頭の曲り具合は他村の者には見えないのだから、曲っているのは自分たちばかりと思うのも無理はない。

しかしこれはリアリズムの小説の世界ではなくフォークロアであって、現象の取組み方が自ずと違うのである。従って著者は結論的にこう締め括る。

「唯土俗学上の問題として永く我々に残るのは、何故に神の石が斯な隠し処に中ったのか（イ）、氏神の傷が何故に末々の氏子にまで影響を与えたのか（ロ）、以上の二点である。折口さんのような注意深い人生の観察者で無ければ、いつ迄も此疑を解き得る人はあるまいと思う」

と折口信夫を立てたあと、余談を付け加える。

「至って野蛮な民俗の中には、今でも小石を以て成年に入らんとする男児の大事の物の頭を傷け血を出し、之を部落の神の思召又は命令と信ずる者のあることである。此風習の痕跡が半開以上の人民の間にも残って居る例は、見ようと思えば外国人の書いた参考書がいくらかあります」

外国人の書いた参考書がいくらかあると言われると、どうも隠し処を巡る話は世界中にあるということになる。確かインドあたりでは、男の物は神として崇拜される風習があり、リングという名がついているということだ。人類が存続する根源の半分を背負っているのだから当然で、それ以上もそれ以下の議論も無用である。とは言うものの、人類の歴史は変転自在である。リングの神を崇拜するどころか、それを料理して食べようとしたという前代未聞の出来事が近年報じられことがあるのだ。神は死んだところではない。

先般ある知人から、余りの綺談だからと言って新聞の切抜のコピーが送られて来たことがあった。唾然とする内容である。二〇一二年九月十八日発行の朝日新聞の記事である。タイトルは「局部調理容疑で送検」とあった。柳田の「氏子の特徴」が書かれてから、ほぼ百年後の事件である。短い記事なのでそのまま引用する。

「東京都内のライブハウスで5月、切断した男性器を調理して客に食べさせるイベントがあった問題で、警視庁は18日、男性器を提供した神奈川県相模原市のイラストレーターの男（23）ら運営に関わった男女4人をわいせつ物陳列容疑で書類送検し、発表した。保安課によると、イラストレーターの男は3月に病院で男性器の切断手術を受け、冷凍保存。4人は5月13日夜に杉並区のライブハウスで、男性器をフライパンで炒める様子を大型スクリーンで約70人に見

せた疑いがある。男は「自分で食べるつもりだったが、手術代が高く、金が欲しかった。もっと配慮すべきだった」と話しているという」

かつて中国には宮刑と言って二つの球を廃する刑罰があった。男性としての機能を失った者は宦官と称された。新聞に出たイラストレーターは刑罰によってではなく、医師の手術によって大事な所を切除されたのだから、何か致命的な疾患があったに違いない。氏神同士の喧嘩で、隠し処に小石をぶつけられた方の神の氏子は、物の頭が曲っているというが、新聞種になった若いイラストレーターの氏神は、相手の神様の投げた石で隠し処の機能を完全に失いでもしたのであろうか。現実にはフォークロアの世界ではない。いや、新しいフォークロアの創造が始まっていると言ってよい。

「手術、冷凍保存。フライパン。ライブハウス。大型スクリーン。警視庁。猥褻物陳列。男性器・・・」

百年前の伝説や民話にはこんな用語は一つも入っていない。民俗学の先生は有名なシェークスピアが女性の秘密の場所を「賢所」とほのめかしたように、男については「徴」とか「物」という文字を当てて暗示したのであった。しかし時代は進み、現代人は猿がラッキョウの皮を剥くように、曖昧なものはすべて剥ぎ取らなければ気が済まないらしい。今や科学技術がそれを応援してくれる時代で、修辞などという小難しい言語操作は文明の進歩に邪魔になるのかも知れない。

(完)

① まゆみ床屋（中山平温泉・宮城県大崎市）

五月に陸羽東線中山平駅周辺を歩き、初めて見たときから気になっていた「まゆみ床屋」に入ってみた。

まゆみ床屋は国道沿いで川のほとりの木立の中の一軒家。なんとなく不思議でレトロなたたずまいだ。

ハサミの絵の入った黄色い看板がいい。

もちろんあるじはまゆみさん。

床やさんは土地の話聞くにはうってつけだ。

僕のカットがあらかた済んだころ、予約の男性客が来て隣りの椅子に座った。

するとまゆみさんがその人に語り始める。

「〇〇さんがこの前なるごの共同浴場さぁ行ってさぁ。表に年寄りの押すカートが一台置いてあったんだと。誰か来ているんだナと思ったけど、だーれも居なぐってさぁ、そんなに気にもしないで風呂さぁ入ると湯ぶねにばあちゃんが浮いとったんだと」

客は「ヒエーツ」と椅子の上でのけぞる。

まゆみさんの話ではそれからが大変で、第一発見者の知人は事情聴取でなかなか帰してもらえない。

事情聴取は駆けつけた何人かの人を対象に行われ、全員の聴取が終わらないと解放されない。

かなりの時間がかかった。

その知人はショック覚めやらず帰宅したものの、なぜか周りの人たちが「お悔やみに行ったほうがいいんでないか」と言う。

なんで私がそんな見ず知らずのばあちゃんのお悔やみにと思ったものの、そう言われてみるとやはり迷う。

なんとなく後味が悪いので、気持ちの始末が着くかも知れないと、とうとう知らない家に弔問に。

香典をくるみ、お線香を上げて来た。

まゆみさんは「まったぐねえ、おかすな話だねえ」と言いながら客の髪にハサミを入れていた。

黙って聞いていたものの、東北の人たちの優しさが知られた「おかしな話」だった。（完）

※ 後日譚だが、鳴子温泉では多い年は何十人もがお風呂で亡くなるとか。酔っ払って風呂に入るのがいけないようだ。真相は分からない。

## ② みちのく食堂（赤倉温泉・山形県最上町）

台風一過の青空と白い雲を見ながら、山形県最上町の赤倉温泉に向かって歩いた。膝の痛い僕の足で四十五分。

お昼ちょっと前に着く。

なぜかあまりに疲労感が強いので一休みしたくなり、とにかく腰掛けられるところと、温泉街に入ってすぐの大衆食堂に入った。

看板には「みちのく食堂」とある。

客はひとりもいないのに、太った大将がなにやら忙しそうにウンウン言いながら、中華鍋を引っ掻き回している。

彼はしきりに厨房の奥に声をかける。

奥からは「はいはい」と鳥のさえずるような可愛い女性の声がきこえる。

奥さんだろうか、娘さんだろうか。

大将が僕の注文した鳥ソバを運んで来てくれた。なんとなく覚束ない足取りが気になった。

出前に行くと言って、大きな木の手提げ箱に幾つものドンブリを入れている。

「出前に行かなくっちゃならないから、留守番しててよ」と奥に声をかけると「は〜い」と言って出て来たのは、かなりのおばあちゃんだった。

おばあちゃんがその可愛らしい声の主だったというのは、彼女の話聞いて分かった。店はふたりだけでやっているというからだ。

「息子は蜘蛛膜下出血をやって足が悪いんです。私は腰が悪くてね。でもふたりで何とかやっています」

「ここも以前はずいぶん賑やかだったんですよ。今はすっかり客が減り、店も三分の一ほどになりました。隣りも、もうやっていけなくてやめました。本当に寂れました」とニコニコしながらも、しみじみ語る。

いつの間にか、出前は客のほうから車で取りに来ていた。

みな事情は知っている。

おばあちゃんはしきりに客に頭を下げていた。

鳥そばはおいしかった（五五〇円）。（完）

① こけし（鳴子温泉・宮城県大崎市）

鳴子温泉駅から新庄方面にしばらく行った瀬見温泉を訪ねた。小さな古い温泉街ははるか昔にタイムスリップした感じで、その不思議な印象を反芻しながら、また汽車で鳴子温泉の自炊宿に戻る。

風呂に入り、ガイドブックで知った「こけし」という飲み屋さんに行く。

すでに部屋で少し飲んだので一杯だけ（おでん、漬け物つき・千円）。

奥のお座敷は若い人たちでいっぱいだった。

僕の隣りのカウンター席にも、お座敷からこぼれたのか男・女・男の三人が掛けている。

しばらくすると隣りに座る彼が突然「クラス会なんです」と僕に語りかけて来た。それなりに出来上がっている。

「四十歳なんです。本当はまだ来年なんですけど、まあ四十ということで」（この辺りでは前厄というらしい）...なかなかのイケメン好青年。

息子たちと同じ世代なんだなと思いながら、改めて奥の若者たちの顔を見わたした。

どうやら、僕に話し掛けて来た彼は隣りにかけている彼女に学生時代から気があるらしい。

真っ赤なスーツの彼女は、見ればなかなかの美形。

彼はしきりに「お持ち帰りしたいんですけどねえ、奥さんに怒られちゃいますからね」と僕に言う。

「お持ち帰り」ねえ。

そういえば孫のYがお母さんとよその家に行って、イチゴとか出されると「ねえお母さん、これお持ち帰り？」と言うので、恥ずかしくて困っちゃうと次男のお嫁さんが言っていたのを思い出した。

僕はひとり笑ってしまった。

散会の時が来て、ついにお持ち帰りは諦めたようだが最後まで諦め切れなかった彼の心残りがちよっと微笑ましく、気分のよい晩となった。

やがて若者たちの声も聞こえなくなり、僕も椅子を立てて宿に帰った。

② ○○テイ子さん（鳴子温泉・宮城県大崎市）

晩秋の十月十三日、朝九時二十分ころ。

会計を済ませ姥の湯自炊部の玄関を出ると、向こうからお風呂に来たらしいちっちゃなお婆ちゃんが歩いて来る。

地元のお年寄りが何人かここのお風呂には来ている。毎日自転車で来るおじいちゃんもいる。宿の配慮かお金を払っている気配はない。

僕の顔を見て「帰るのか？」と言っているようだ。

「これから駅に行きます」と言うと、僕の大荷物を見て「車でか？」と言う。

「歩いて」。

お婆ちゃんは「へえーっ」と驚く。

お婆ちゃんは耳が遠いみたいで同じことを何度か大声で言わないと通じない。

列車の発車時刻は知っているらしく「まだゆっくりだ」と言いながら僕に玄関脇のベンチに座れと言う。

「あんた、どこから来たの？」「千葉の松戸というところから」「ひとりで来たの、お母ちゃんは？」

僕はどう答えていいのかちよっと考えて「ひとりです。かみさんは別のところに行くから」などとわけの分からぬことを言ってしまった。

「私はね、ここにお風呂に来たの。家にもあるけどな、手すりがないからね。ずーっと地元だから（多分、宿のおかみさんから）入っていいって言ってもらっててな」。

「なんで一緒に来んの？」と言いながら「あんた幾つ？」と聞く。

手のひらメガホンでお婆ちゃんの耳に「六十七」と大声で言う。

「若いなあ、じゃこっちのほうもまだまだ大丈夫じゃろ」と、笑いながら僕の左の足の付け根あたりを右手でポンポンと叩いたりする。

「お婆ちゃんは幾つ？」と聞くと「八十一。でも一月だからもうすぐ八十二」。

いきなり「松戸名物は何？」と聞いて来た。

はて、松戸名物って何だろう。茄子の与一漬け？ ...他に何かあったかなあと考え、思わず「デズニーランド」と言ってしまった。

「デズリーランド、近いの？」「デズリーじゃなくデズニー」と言いながら、しまったデズニーは松戸ではない。

まあいいかと思っていると「あんた書くもの持ってるか。私の所番地教えるから、あんたも教えて。こんつき来るとき松戸名物買ってきて。私も鳴子名物買って待っているから」と言う。

僕が自分の名前や住所などを書いた紙を渡し、お婆ちゃんのは聞きながらこちらで書く。

「これ電話番号？ ...私が電話したらあんたの奥さん変に思うでしょ」。

こんなに耳が遠くて電話通じるのかなと思いながら「大丈夫、事情話しとくから」。

八十一歳のお婆ちゃんとのやりとりが楽しい。

「お婆ちゃん、どこで暮らしているの？」「町営住宅」「家賃いくら？」「七千円」「へえ安いね、今度泊めて」「ダメ、近所がうるさいから」。

そんなものかなあとと思っていると、突然話が変わった。

「私の亭主はな、四十七の時突然死んだ。心筋梗塞。あっという間だった。私は四十。娘が二人いてな、キツかったなあ...」。

しばらく宙を見るような表情をして「あんた、心臓は大丈夫か？」。

またちよっと考えて「まあ」と首をタテに振る。

「そうか、そうか。気をつけんとな」とお婆ちゃんは優しく僕の顔を覗き込んでニッコリする。  
「じゃ、そろそろ行きます。お婆ちゃん、またね」。

「今度来るとき松戸名物忘れんでな。それから来るときは電話してな。二～三日前。夜な。昼間は病院とかでおらんから。元気でな」。

お婆ちゃんは〇〇テイ子という名だ。

僕が「宿」という字の上にカタカナでシュクと振ったら「私は学校行つとらんから字がダメでな。これカタカナか。カタカナでなく、分かるように書いて」という。

「宿」の下にひらがなで「しゅく」と書き足すと「ああ、あんたしゅくやさんというの」と嬉しそうに頷く。

僕に自分の名前を書かせるときは「苗字はな〇〇、名前はテイ子。テイはカタカナのテ・イな」と言っていた。

カタカナはダメだと言っていたけど、さすがに自分の名前は大丈夫なんだな。

八十一歳、〇〇テイ子さん。

またね、きっと。松戸名物持って来るからね…。(完)

二年ほど前に能面の四回目の個展を開催した。会期中いろいろなことがあったけれど、忘れがたい場面があった。七十歳を過ぎたご婦人が「萬媚（まんび）」という若く妖艶な面の前でしばらく考えてから「淫靡ってどういうことかしら？」と質問したのである。戸惑いながら答えの言葉をさがした。「淫らでくずれているということでしょうか。妖艶というより、もうひとつ露骨で下品ということになるのかな」するとさらに驚くべきことを言い出した。「淫靡な面を作っていただけないかしら」「それはまたどうして？」その面を掛けて棺の中に納まりたいのです」

さすがにこれに対して言葉を失った。そのまま曖昧にその場は終わってしまった。そのご婦人は芸大出身の美術に造詣の深い方であり、ローマカソリック教会に通う信者で洗礼を受けておられる。真面目にこれらの言葉を発しておられ、本気なのであった。彼女は「末期がん」を患っていて、回復の見込みがないことを自覚している。それにしても「汝姦淫するなかれ」と教えているキリスト教の教義と矛盾しないのだろうか。その大胆な言葉にただ首を傾げるばかりであった。

こういわれたことに驚いた理由はもうひとつあって、じつはその一ヶ月ほど前に同じことを言われていたのである。ダンスで知り合った五十歳の女性がいた。彼女も芸大の出身で都立高校の美術教師である。しかも難病指定されている「膠原病」の患者だ。一年半の長期休暇中で退院後のリハビリのためにダンスを始めたという。

その最初の出会いが衝撃的だった。あるダンスの講習会に行くと、そこに一際目立つ女性が居た。身長百七十センチはあろうかという長身、若かりし頃はミス・コンテストに出てもおかしくないようなボディーラインの持ち主だった。入院後十五キロ太ったというだけに豊満にしてはちきれんばかりの肉体を、肌に密着した豹柄のドレスで包んでいた。こんなに若く魅惑的な女性はこうしたダンスの会には絶対とっていいほど現れない。ウィークデイの昼間なのだから、皆六十歳は過ぎている。

ダンスが終わって帰途に着くとき、話しかけるとたちまち深い会話になった。わたしが面作りをしていると知ると、「わたしの面を作って！」と言い出した。写真をいろいろな角度で撮れば作れるというと、早速写真家に頼んで撮ってもらったという写真を電送してきた。その写真に添えられていたことばに目を疑った。「淫靡で妖艶な女に作ってください」とあったのだ。淫靡！

なんと大胆な言葉を書くものかなと、ただ啞然とするばかりだった。

その同じ言葉を、こともあろうに七十歳過ぎの上流の奥様から聞こうとは。この両者には共通点がある。ともに芸大出の美術を専門とすることと、命の崖っぷちに立っているということだ。かたや末期がん、こなた膠原病、わが身の終末を覗くことになると、こうした根源的な欲望に身をさいなまれるということなのだろうか。

元ミスコン女史にダンスパーティーに誘われた。そこでもおおいに目立つ存在だった。巨大な胸の谷間も悩ましいショッキングピンクのドレスで会場に現れれば、視線を一身に浴びることになる。そんななかで組んで踊ると、それがまたすごい刺激なのだ。体全体に厚みと張りがあり、しかも燃えるように熱い。豊満なバストがわたしの胸にぶつかってくるばかりか、張りのある下



腹が密着して太股をからませ、押し合い揉みあいするように踊ると、汗が噴出し女体の背中に回したわたしの右手は汗にまみれてくる。あえて言えば「快なること情交するが如し」だった。

さっそく写真から型を起こして面作りに取り掛かった。たちまち二面彫り上げたが、ご注文のように淫靡にはならない。それはそうだ、どだい無理な注文なのだ。肉体こそ妖艶そのものではあるが、顔はすこぶる知的な顔なのだ。その顔をまずはしっかりと写さなければならない。となると淫靡どころか、普通の色気さえ出てこない。そもそも淫靡な顔とはどういう顔なのか、それさえ分からない。

それにしても「淫靡な面」を欲しいと二人の女性に言われるとは、どういうことなのか。このようにはっきりと要求してくる女性が居るということは、潜在的に同じ志向をもつ多くの女性が居ることになるのかもしれない。淫靡とは虚飾を取り去った女の欲望そのものを象徴しているようにも思える。死がすぐ目の前に迫ったとき、そうした心境に達するということであろうか。

さてその後、末期がんのご婦人は鬼籍に入られ、膠原病の妖女は車椅子生活となって、ほとんど活動できなくなってしまった。面の出来は悪いものではなかったけれど、いろいろな事情があってまだ手元にある。（完）

## 絵画鑑賞

二〇一三年に退職した。老後は日本で暮らしたい考えている。帰国したらニューヨークにはなかなか来れないだろうから、行っておきたい場所、したいことをリストアップした。まずメトロポリタン美術館。今まで何回も行ったことがあるが、まだ全部見切れていない。私のアパートから歩いて二〇分なので、毎週でも通いたい場所だ。

高校時代に、先輩に連れられて絵画展を見に行ったことがあった。美術専攻の先輩に「この絵画はどう鑑賞したらいいのでしょうか」と聞いた。「そんなことは考えなくていいんだよ。絵を見て、好きか嫌いか、何か感じるものがあるか、それをそのまま受け取ればいい」という答えだった。それからは、この絵は何を表現しようとしているのかなどは考えないことにした。絵の前にぼーっと立って見るだけの絵画鑑賞である。コバルトブルーや赤などの色が使われていると無条件で好きになるが、それ以上に絵から出るエネルギーを感じるのが好きだ。セザンヌの静物からもすごいエネルギーを感じるし、その近くにあるゴッホの自画像は狂気ともいえるエネルギーを出している。

二年前に姉と徳島の大塚美術館に行く機会があった。世界の名画一〇〇〇点以上が陶板となって再現されている。絵画鑑賞が趣味の姉は、本を買って一つ一つ丁寧に見ていた。壁画などは見事なものだったが、どの絵からも何のエネルギーも感じられなかった。建物もコンクリートだったし、すべてが無機質だった。今ニューヨークで「リ・クリエイト・フェルメール展」をやっている。これはフェルメールの全作品をデジタルで再現したものだそうだ。約二年前にフェルメールの「真珠の首飾りの少女」を見たので、デジタルからも同じようなエネルギーが感じられるか興味がある。ぜひ行ってみようと思う。（完）



メトロポリタン美術館（ニューヨーク・2015年3月筆者撮影）

信号無視

一九八八年八月にニューヨークに移住してから、二〇一三年十二月に退職するまで夢中になって働いた。特に定年はないが、関節炎になったのをきっかけに六十四歳で退職することにした。その後、特にすることもなく毎日ぶらぶらと過ごしている。テレビは日本語番組、読むのは日系のコミュニティ新聞、食事は日本食。アメリカ人の友達もいない。テレビで日本の小旅行とか、各地のうまいものなどを見る度に、老後は日本がいいと思うようになった。帰国したらもう二度とニューヨークに戻ることもないだろうと思うと、急にニューヨークが愛おしくなった。

長い冬が終わり、少しずつ街に出始めた。前と違った感覚でニューヨークを眺める。何と言ってもニューヨークらしいと思えるのは、歩行者の信号無視ではないかと思う。赤信号でも平気で渡る。信号無視をして後ろめたいと思って渡る人はいない。車が来なくてもおとなしく信号が変わるまで待っているのは、ほとんどが旅行者だ。ニューヨークに来たばかりの時は、歩行者の行儀の悪さに驚いたが、何年かすると信号無視の光景に慣れてきて、自分でもするようになった。ニューヨークではほとんどの道が一方通行なので、車が来る方向を見れば渡れるかどうか分かる。

昔、「赤信号、みんなで渡れば怖くない」というギャグが流行ったが、あれは極めて日本的な発想だと思う。信号無視はルール違反だが、みんなで悪いことをすれば目立たないし、自分一人がお咎めを受けることもないという解釈だろう。ニューヨーカーはそういう発想はしない。他の人がどうしようと、赤信号でも自分が渡れると判断して渡るのであって、ルール違反という意識はない。警官も堂々と信号無視する。

信号無視に慣れてしまうと、逆に日本で、全く車が来ないのにみんな信号を守っているのを見ると驚いてしまう。車が来ないのに、なんでみんな渡らないのだろう。ある日、三鷹警察署の前の一方通行の道で、車が来なかったので渡った。そこに若いイケメン警察官がいて、ニコニコしながら私に近づいて来た。「信号無視はいけませんよ」と優しく注意してくれた。なんだか後ろめたい気持ちになり、「これから気を付けます」と素直に謝った。日本では信号無視はしてはいけないのだった。帰国したら信号無視は止めようと思うが、明らかに車が来ない一方通行の道を渡らないという衝動を抑えるのに苦労することだろう。（完）

## 第二十一回（二〇一四年歳晩）風狂の会 川柳忘年会 覚え書き

——あわせて『一読者の戯言』（北岡善寿著）出版のお祝い

風狂の会恒例の「川柳忘年会」は今年（二〇一四年）は二十一回目で十二月七日（日）に吉祥寺でおこなわれた。

今回は川柳に加えて風狂の会の世話役でもある、北岡善寿氏のエッセー集『一読者の戯言』出版についてのお祝いの集いを兼ねることとした。

余談はともかく、早速川柳互選の結果発表から始めよう。

応募川柳は詠題「隠れ蓑」三十三句、「自由詠」三十三句と同数であるが、詠題、自由詠と別々に、この中から出席者の匿名互選で夫々入選三句、佳作一句を選ぶことになる。

## ◎ 詠題「隠れ蓑」入選作品

第一席	隠れ蓑	一つだに無きぞ悲しき	善寿
第二席	アベノミス解散選挙隠れ蓑		高明
第三席	詩人には紙とペンが隠れ蓑		武彦
佳作	密漁船	領土をねらう隠れ蓑	耀

今回の詠題は題が良かったようで第一席から佳作に至る四句とも、なかなか鋭く急所を突いている秀作揃いとみた。まず第一席は、さすがにエッセイストらしく、そこはかたない哀愁がただよっていて見事である。だが、なんども口ずさんでいると「蓑ひとつだに無きぞ悲しき」という韻律が歴史の彼方の空に浮かんできたような気がしたのは、筆者の幻影なのだろうか。

第二席は安倍首相の本音を鋭くずばり指摘した点が買われたものだ。正攻法による政治批評がいい。

第三席はそのものずばり、詩人としての発想といえる。作者は常連入選者のひとり、この句の如く詩の方も秀作の連発を期待している。

佳作は国際問題をとりあげた秀作。この句もまた堂々たる正攻表現の句であり、佳作にしておくのは惜しい。

さて、筆者の主観で敢えて選外の佳作をあげてみよう。

- |   |                  |     |
|---|------------------|-----|
| ① | 沈黙を孕んだ石の隠れ蓑      | 遊   |
| ② | カネにコネ社名学歴隠れ蓑     | 昌憲  |
| ③ | 隠れ蓑 はがしてみればタヌキ一匹 | ますみ |

- ④ 隠れ蓑 定年のあと 編み直し 武彦
- ⑤ 首脳らの笑顔は憎し隠れ蓑 耀
- ⑥ 隠れ蓑 お古を着ると透けて見え 善寿
- ⑦ 隠れ蓑 かぶった帽子をぐいと下げ ますみ
- ⑧ 泣きわめき 県議乱れる 隠れ蓑 ふみを
- ⑨ 「恐妻」という「愛妻」の隠れ蓑 詩夏至
- ⑩ 隠れ蓑無ければ言えぬ野次の人 昌憲

十句程とりあげた。入選者の名前も今回はいくつも見えるが、これはあくまで筆者の主観で選んだ結果である。入選句と肩を並べる作品も決して少なくない。

### ◎ 自由詠 入選作品

- 第一席 密漁船 追い払えない 九條の国 耀
- 第二席 理屈好き嫌われているとはつゆ知らず 雅樹
- 第三席 韓（から）の国の良識人（びと）らよなぜ黙る 耀
- 佳作 電子化で世界中が井戸端化 昌憲

第一席は例の中国の珊瑚密漁船が大挙来集。日本国民は歯軋りしてくやしがっている。その共通意識が票を押しあげた。

第二席は古くから言われている普遍的な人間性のひとつ。例をあげれば、安倍首相のような人間がなんとなく女性たちに嫌われ易いのではないか。人は好きずきだが、なんとなく判る気がする。

第三席は日韓の現在のようなギシギシしている関係について、心ある日本人は不思議に思っていたことを見事に突いている。

佳作は「世界中が井戸端化」という表現がなんとなく面白い。

さて、入選作品四句は勿論一般的水準を越えた句である。

だがしかし、ユーモアとか滑稽さとか、自由詠らしいバラエティに富んだ面白さがあるよというような気がする。言うなれば、優等生的ということか。

そこで、筆者の個人的見解による選外佳作をあげてみよう。

- ① 窓際の風よ不惑の旅心 詩夏至
- ② ぬくもりの言の葉痒い再雇用 高明
- ③ 猫がひっそりと舐めている露地真昼 遊
- ④ 親子鷹 あっちこっちで声を挙げ ますみ
- ⑤ 裏方に回り静かな昼休み 詩夏至
- ⑥ 赤サンゴ盗られるままの無力かな 武彦

- ⑦ しあわせはオレオレの来ぬ老い住い ふみを  
⑧ 人妻と逆光の森行き暮れる 高明  
⑨ 一読者の戯言面白し戦中派 精一郎  
⑩ 芝居観せ 木戸銭くすねちゃダメヨダメ ふみを

十句程列举した。玉石混交かもしれないが、入選作品のように、きっちりとした表現でないところが、なんとなく心地よい。

どこが心地よいと言うのか、と反問されれば、一言で言えば、自由律川柳とでも表現できようか。あるいは詩人らしいと言ってもよい。自由な心で川柳をつくっている。

少しく横道にそれるが、「詩人らしく」と言えば、「詩川柳」という言葉を思い出す。「詩川柳」とはなんといい得て妙。この言葉にとらわれて格闘したひとりの川柳作家がいたのだ。

その人は高鷲垂鈍という一九〇八年（明治四十一年）二月、朝鮮京城生れ、（詩人としてのペンネームは藤村青一）会社を経営していたが倒産。多額の債務をかかえ過労と失意のため緑内障にかかり失明、苦難の道を歩いたが、平成元年四月十五日八十二歳で死去している。

さて、問題の「詩川柳」であるが、失明前の昭和三十年代には「川柳雑誌」に垂鈍の名で独特の詩川柳論を盛んに執筆。この長文の柳論をまとめて『詩川柳考』（昭和三十六年刊）が刊行されている。

彼によれば、詩川柳とは朔太郎のロマンチズム詩論を旧約とし、春山行夫、北川冬彦などの散文詩論を新約として、現代川柳論を確立せしめたる原始未開の既成柳界に投じた処女文学理論とでも言えようか。それでは、どんな川柳が詩川柳であるかと問えば、彼は言下に答えていわく「君たちが、こりゃ佳いと感動した川柳が詩川柳さ」ととぼけていた、と言われている。筆者の見るところ、彼は所詮一介の川柳評論家に過ぎないと思う。

そこでもうひとり本物の詩川柳家を紹介し実作にふれてみたい。

その人の名は田辺幻樹。戦前の『川柳研究』誌の黄金時代、主宰者川上三太郎を支え、師三太郎から門下随一の詩川柳家と囑望されながら三十七歳の若さで昭和十九年三月肺疾患のために死去した。

—— 母の語るわが生立ちは蝶遠き

この遺詠でわかる通り彼は粹と張りを誇りとした純粋な神田っ子である。

昭和七年頃から清幻の名で川柳界にデビューしたと聞くと、昭和十四、五年から死没当時までの間に於ける現役作家中の第一人者であった。作家としての彼は作品の上から、詩精神の上から、或いは作品態度の上から見て、今までの川柳作家が持たなかったものを持っていた。

既成大家に抱く不満は詩精神の貧困と作品態度の怠慢さにあったが、中堅作家としての彼は我々のこういう不満を一掃してくれた。

又彼の作品理論は、理論の乏しい川柳界に於いてずば抜けていた。そして其の理論を完全に作品化する実力を持っていた。川柳界の俊秀として衆目を集めた彼の死は痛惜の想い切である。

以下、作品を紹介する。

- ころろはや狂ふに果てし冬の濤（なみ）
- 去りて指折らるる幾日神に告ぐ
- ふす肌に百夜の秋をもてあます
- 冬を逆に見上げあばらがポコンと鳴る
- 手枕に朝日はあつき胸の癒え
- 合掌に光りめくれて母子の膳
- 振り返るものなき朝の床うすし
- 風かなと呟く足の爪が伸び

以下、遺句抄より

- 病者字を書かず漠たる春の穴
- 病む唇（くち）を拭ふに早き春の羽根
- ペン持って今こそ遠き文字の数
- 散薬のひととこ光り夕ざれる

若干難解であり、寂寥が匂い立つ。彼は若くして病を得てより二十数年、喀血幾十回、病への闘いの一方には並々ならぬ川柳の闘いがあった。それらを考えると、やむを得ないものがあった。まあ「詩川柳」とはこんなものかと味読して頂ければ幸いである。

以上で川柳互選、結果発表、表彰、筆者の感想を終える。次に『一読者の戯言』出版を祝う会に移る。

## ◎ 北岡善寿氏のプロフィールと『一読者の戯言』の紹介（高村昌憲）

高村昌憲氏から、まず北岡善寿氏のプロフィールが懇切丁寧に紹介された後、『一読者の戯言』を通読し、全篇を通して客観的に感じた傾向を端的に言えば、と前提して次のとおり話した。

（箇条書きにする）

- ① 議論を求めない。
- ② 真実は永遠である。
- ③ 諧謔的パラドックスである。
- ④ 現代（太平洋戦争終戦後）にふれていない。
- ⑤ 軍隊生活は決して貴重な体験だったとはいえない。

等々である、と。

さて、「あとがき」はユーモアをまじえて、謙虚に述べているが、そのなかに、その筋の新聞



に「これは無手勝流のエッセイだ」と言った人がいたことを紹介している。

無手勝流という言葉はどう解するのか問題もあるが、それはそれとして、彼はそんな無手勝流なんてものではなく、内容は多岐にわたり豊富で単なるエッセイと言うより学術書と言いたいくらい秀でたものであると話をしめくくっていた。

◎ (講演) ポツダム宣言の受諾について (中平 耀)

ポツダム宣言を日本は受諾したので、太平洋戦争は終結し、日本の敗戦は確定したのであるが、中平耀氏の講演が今回この問題を突如として語り出すとは予想だにしていなかったので、少々驚いた。しかし、筆者としてはよく考えてみると北岡善寿氏の『一読者の戯言』には高村氏の紹介の言葉のひとつにあった如く、「戦後七十年経過した現代についてはひとつもふれていなかった」ということに遠因があるのだと好意的に解釈した。すなわち中平氏としては、抜け落ちている現代の代りに「日本の敗戦」それはポツダム宣言の受諾という重要な問題を提起し、且つ二人の著名な評論家の相反する議論をエキスをした話をするにより、ひとつのむすびとしたのではないか。そんな風に思ってみたのである。

ひるがえってみると、実は明治維新から太平洋戦争までが七十三年あまり、戦後日本は七十年の平和を享受してきた。戦前と戦後の二つの日本は歴史上ほぼ同じ長さを占めている。

従って著者がこの本のなかで語ったのは、前半の約七十年であり、戦後の七十年(現代)を語るにはほぼ同じ長さの七十年を語らねばならないから、もしも続編を書くとすれば同じ分量位にはなると思える。

余談を縷々述べたが、ここで中平氏の講演の要旨を簡単に言うと、中平氏は著名な二人の評論家の実名を挙げ、ひとりは本多秋五で、このポツダム宣言の受諾は無条件受諾だと言い、いまひとりの評論家は江藤 淳で、条件つき受諾だと言う。まったく相反する考え方で論争があったというのである。

条件つき受諾の根拠は、ポツダム宣言条文の十三にあるところの「日本軍隊の無条件降伏の宣言を要求し、」というところに理由の根拠を求め、この受諾は畢竟日本の軍隊が無条件降伏したのであって、一般国民はあづかり知らないことだというのであった。

実は、筆者は寡聞にして、この論争については、まったく知らなかった。従って論争の詳細を知らない筆者に意見を言う資格は無いと思える。しかし筆者はその当時すでに成人に達しているので、昭和二十年頃から敗戦に至る状況について、きびしい情報統制はあったもののうすうすは感づいており、一般国民も同様であったと思う。

昭和二十年三月十日には東京は大爆撃に会い、甚大な被害にあった。代々江戸っ子であった筆者の肉親、親戚も多く死亡した。また、沖縄に上陸した米軍に対し、陸海軍は特攻機作戦を展開したが、効果なく遂に占領され、八月上旬には広島、長崎に原爆が投下された。米軍の本土上陸も間近いと言われていた。一方ソ連は日本敗北を予期し、日本との不可侵条約を一方的に破棄して突如満州および千島列島に攻めこみ、あわよくば北海道をものにしようとしている。このまま

でいけば米軍の本土上陸が敢行され、本土は火の海と化し、二度と立ちあがれない状況になるかも知れない。飛行機もあらゆる兵器もとぼしく、日本国民は竹槍で防ごうというのだから、まったく無茶な話である。幸いに天皇の聖断でポツダム宣言を受諾し、日本は完全に敗北した。

さて、中平氏のこの論争に対してのご意見はたしか無かったと思った。ただこういうことがあったという客観的な紹介に過ぎなかったと記憶する。

筆者としては、上記の通り敗戦直前の状況を縷々書いたのは、たったひとこと言いたかっただけである。

二人の論争は、それがおこなわれた当時から、そして現在に於いてもまったく不毛の論議ではないかと思えるのである。

「永谷スペース四十」でおこなわれた「川柳忘年会その他」は午後二時から始まり、上記の通り予定を全部終了した。午後四時となったので「吉祥寺ビアホール」に場所を移し「出版を祝う会」を開催する。

#### ◎ 北岡善寿氏の出版を祝う会 (司会 堀口精一郎)

高村昌憲氏の開会宣言で最初にご本人の北岡善寿氏のご挨拶があった。謙虚の中に一本筋の通った話であった。たしか『一読者の戯言』の「あとがき」からうまく引用して、「これは無手勝流のエッセイだ」と批評した人がいたが、「刀を振りかざして不意に襲ってきた相手を、炉端の鍋の蓋で制した」という伝説の剣術使いの流儀らしいが、それ程の腕前のある筈もない。と比喩で語って聞き手を煙にまいていた。

次に乾杯の辞を指名された倉田武彦氏は、ゆっくりと立上がり、にこやかな笑みをうかべて、なめらかにお祝いの言葉をのべた。

突然の指名にもかかわらず、その態度ならびにスピーチの中味に感心した。場なれしているのである。

皆で乾杯した後、出席者が夫々挨拶やら読後の感想やらを語り出し、場はなごやかな雰囲気につつまれ、お祝いの会らしくなっていた。

筆者もなにか語ったが、次第に酔いがまわってきて、誰が何を語ったかは、すっかり忘れたが、断片的に思い出すままに箇条書きにしたい。

① この本は一読者の戯言と題しているが、たわごとどころか、非常に面白い。学術書の匂いすら感じられる。

② 日本の近代史のなかから、作家を中心として評論家から時代に反逆したアナキストたちに至るまで幅広く、面白い話をとりあげている。又その資料を文章のなかで、はっきり明示しているところがにくい。昭和十年前後の文藝春秋とか文藝とか、なかには昭和二年頃の綴じがほどけるようなボロボロの資料まで読みこんでいる。恐らく誰か古い先輩からゆずられたものだと思うが

、近代史に並々ならぬ興味をいだいているところはさすがである。

③ こういう文学的エッセイを後世に残しておくことは、たいへん有意義なことで、特に文章がいい。著者の文章力は定評のあるところであり、筋が一本通っていて読ませる。ただ標題をもっと堂々たるものにして「一読者の戯言」はサブタイトルにすればよいのではないか。

④ ヘーゲルの言葉に「人間は歴史から何も学ばない。それが最大の歴史の教訓だ」と言ったが、「歴史に学ぶ」のは難しい。しかし、「歴史に」ではなく「歴史を学ぶ」ことは大切だ。人間とは何か、人間を知ること。そのような意味で、この本を読むことは有意義である。

⑤ なかに特に面白いものがある。人によって異なるが、「一読者の戯言」「或る随筆」「焦土外交の行方」「つわものたちの遠景」「一口嚙から」「難解の奥行」等々あげていったらきりがない。

⑥ 今回の風狂の会での出版を祝う会は、心ある人々の会合で楽しかった。

以上の通りである。閉会の辞は誰が言ったか判らないが、つれだってたしか二次会に行ったような気がする。（おわり）

## プラトン

私には二組の聴講者がいました。両方とも大変に質が高く、アンリ四世校の男子たちと、コレージュ・セヴィニエの女子たちでした。両方とも同じ理念と厳格なやり方で教えました。大変早いうちの質問や議論や生徒たちによって行われる発表、そしてあらゆる怠惰な手段を排除しました。苦勞してついて行き、大変な努力で勉強してから解って来る学習が、一人ひとりの精神を最良のものに解放することを私は経験から理解していました。両方の聴講者は直ぐにそのことを見抜き、雄弁家の男子も女子も直ぐに思い止まりました。時として永遠に立ち去りました。そんな者は名前を消すだけでした。沈黙して抵抗する者も何人かおりました。特に男子においては、お互いに変りましたが、興味のあることには耳を立てて聴きながらも、全く別のことを考えている或る種の技術を持っていました。あらゆる教育は不注意によって生きます。しかしながら、全てを吸収する英雄のような者たちもいただろうと私は信じます。でも、私は何も分かりませんし、私はこのことに好奇心もありませんでした。その高いレベルのクラスでは、決して生徒たちを強制させる習慣があつてはなりません。もしも生徒たちが出来るとするなら、彼らは自分のために自分を救うことです。

私は、大変自由にそして大変正しくプラトンを教えました。この著者は殆ど読まれないで誤解されていましたが、大変有名であるという特権を持っています。そのために読者や生徒のやり口に、高慢な観念を与えるに違いありません。何故なら、この真似の出来ない詩に彼らは魅せられる儘になり、大した疲れもなく彼らが与えていない努力を、煉獄や道の門の如く与える必要のある部分である、と結局認識するようになるからです。それは多くを知ることです。そして行ったり来たりして、迷い、突然に飛び立って、群を待つプラトンの方法は、恐らく人間に相応しいのです。私も注目した処では、それは横目遣いで大変に狡い休息を取った後でしか、決してものを良く見ないのです。私はこれらの脱線や余談を、大変自然に真似しました。有名な神話ではありません。私は少なくともそれらを伸ばして長くして話す技術を持っていましたが、それは決して些細なことではありません。それらの休息時間は長時間で、寧ろ並外れた冗談から成っていました。例えば雌羊が子羊に説明するものですが、彼らに起きることは全てが良いことであり、主人も良い人であるというその種の話です。あるいは古代エジプトの王が奴隷売買を合理化したので最早、監督も主人もいなくなって仕舞った話です。あるいは更に、イギリス人とその娘のメリーがスピノザの『エチカ』の家を訪問する話で、重々しい鍵の束を持っている門番、その横にある礼拝堂、そして想像出来るもの全ての話です。これらの話は年々繰り返されましたが、新しい話も加わりました。同様に、全てに決して好奇心を持たないで、告解者と知り合いになることもなく、救いの手も差し伸べないジャンセニストの聴罪司祭の話（スタンダールのピラート神父から思い付きました）もありましたが、それは自由と正義への二重の愛によるものです。もう一つ別の作り話は、無頓着な少年たちにもっと直接的に噛み付きました。「私が君たちを注意深く聡明に、ついには誰にも打ち克つ人にする秘訣を持っていると仮定してみましょう。私はこの様な武器を君たちに与えないでしょう。君たちを助けるために、手だけでも差し伸べるでしょうか。それは正しくないでしょう。幸いなことにその様な方法はありません。君たちには探求する余地など何も無い完全な証明があると仮定してみましょう。もしも私がそれを持っていたなら、大変注意深くそれを君たちから隠さなければならぬでしょう。最悪の場合には、証明は精神を事物に変えるだろう、などとラニョー先生は時々言っていました」。この談話はプラトンの的です。彼らは魂を見捨てるように見える丁度その時に、魂を引き寄せます。私はこれらの遊戯を愛しました。少年たちが歳を取ったなら、私と同じ様な喜びをもって思い出して貰いたいと思います。私は少年たちに言います。というのも少女たちに行われている教育は、空想がもっと少ないように思うからです。それは理解されています。

プラトンについて私は終わりそうにありません。『国家論』の対話だけでも（本当に大変な長さです）、今日でも明晰さがあつて、如何なる間違いもない教説の二つの面を仕上げる機会になりそうです。一つ目は名高い〈洞窟〉がまさしく

有名な隠喩によって決して汲み尽くせないことです。もう一つは有名なエルの神話です。そして私と知り合った生徒たちは、これらの巨大なアーチの下を何度も通ったのであり、通らなかつた生徒は一人もいませんでした。ここでは私自身の進歩を示すことは出来ません。一回毎に私は前進しましたし、これからも一回毎に前進するでしょう。プラトンの注解者の一人でプラトンに反駁している者たちの一人である人ならここで、こんなことは全て知られているし、子供じみていてと言って、大きな眼を開けるでしょう。多くの知識の段階で一回毎に私が感嘆するのは事実ですが、何の知識が無くてもその意味を全て知るよう出来ることもあります。何故なら、どんなに真理が隠されていても、経験によって掴まえること、それももの見事に掴まえることが出来ないことはない、と私は思いました。中国人やエジプト人は彼らの古文書の古さのお陰で、数学による間接的方法を必要としないで彗星や食に精通していました。この様にして私は、その当時横行し始めていたプラグマティズムの片方の耳を持っていたと言えるかもしれません。もう一つの耳は、プラトンの『テアイテトス』の中で掴み、プラタゴラス自身があなた方にそれを取らせてくれます。その様にして人は自分に有用なもの、そして単にそれだけを真理として何時も取らせてくれるこの命題を、暴君とか將軍の水準まで彼自身で高めるようになるのです。私が前に引き合いに出した者たち流の冗談を言う好機でもあります。というのも、軍隊に敵が逃げると信じさせるのは有益であり、暴君は不死身であると暗殺者に信じさせるのも有益であるからです。私は体系の中心部分を発見するための最良の道というものを理解しません。それは自由であることが確実であるためには、それを意志的に自発的に行うことで十分であり、私が理解した瞬間に結局はあるが儘に洞察力があつて強い姿を現すのです。しかし、先ずは意志がなければなりません。それ故にこの逆説を前進させることです。最初は活力が非常に少なくても、真の信仰を発見したのです。道は他にも幾つかあります。それらの意志との一致が、確かなやり方を明らかにしています。それ故に私はプラトンを読むことを勧めますし、繰り返し読むことを勧めます。では〈洞窟〉に戻って、囚人たちの言うことを聞いて下さい。彼らには影や反映による囚人としての学問をきちんと持つており、彼らに時間と忍耐力があれば、際限なく理解させてくれることも出来るのです。

私はここで出来るだけ全ての光を投じるために、偽善者の顔を表していたプラグマティズムにとっての良い機会を捉えなければなりません。〈ピュロスの像たち〉（勇敢な生徒たち）がその点に関して農夫のように疲れていたことを私は思い出します。最初に注意すべきことは、プラグマティズムの魂とは意志としての信仰の教説であるということです。私がある様に理解していることは今まで見たとおりですし、これからもその様に見るでしょう。しかしこの教説は、聖職者や不信仰者から二重の厳しい尋問を受けて酷く苦しめられたので、何時も元に戻って何らかの方法で縊りを戻さなければなりません。何故なら、プラグマティズムは私たちの精神に必要なものを信じるようになるのが、真実である訳ではないからです。反対に、プラグマティズムの中に真実があるということが最初の信仰であり、それが私たちの全ての認識の基礎となつて、ついにはプラグマティズムの残りの全てを悪しき策略として非難するのです。というのも、全く皮肉っぽい見せかけに対してデカルトの大胆な操作に私を限定するためには、自由に疑うことであり、独りきりの亡命者になつて人間としてすっかりきれいになつた純粋な結晶としてついには世界に姿を現すようになるからです。それ故にプラグマティズムの真実を、しかるべき場所に置かなければならなかつただけです。そのことはプラグマティズムの仮面も名前も同時に取り上げるのです。というのも、眼を閉じて一つの認識に私たちを導く事物に沿つて行動する必要は少しもないからです。その行動は、何時も単なる最初の行動です。判断力における行動は、反対に私たちは眼を開けて、幾つもの観念を通過して、経験まで生気を与えます。そして、その上でやはりプラトンはその点に関して私たちの教師でしょう。何故ならプラトンは、高次な考えの段階で、あらゆる知識を理解する盲目的な知識による広大な領域を私たちに発見させたのであり、知識の可能な全ての領域を私は言いたいのですが、それは知識の最小の輝きでもないのです。それ故に、明るくなつたり暗くなつたりする〈洞窟〉と、そこに住居する利口な者たちを、人々が更に長く考察することを私は挫くことなく勧めます。

道徳的教義は分散させられているから、把握するのは更にもつと困難です。しかし、グジェースの指輪（1）は、先ず私たちの心を打ちます。というのも私欲と慎重さの規則は、経験に基づいて大変良く誇張されますが、ある程度の権力にとっては恐ろしい意味を持つようになるからです。この光は先ず消えます。プラトンは私たちを置いて行きます（寧ろ、それは私たちの救済に全く無関心なソクラテスです）。次には、良く管理された魂の均衡と健康としての正義の教説に何度も手が加えられて描かれて行きます。地獄への落下は、その青白い光の中で全てが終わります。権力を選択すべきでしょうか。あるいは寧ろ、権力を恐れる必要はないのでしょうか。もしもあなたが小学生の頃に仕方がないにしても後を辿りながら読んだなら、一步一步創意工夫するように私はあなたに教えます。

しかし、私は上昇して行く段階でのあの素晴らしい精神の叙述に戻りたいと思います。戻ることは、もしも私が一つ

の方法を持ったなら、まさしく私の方法になります。そして全てが言われて仕舞ったような時でも、まるでプラトンが全てを奪い取り人が自分で創るのと同じ観念を奪い取るのを是非とも望んでいるかのような時でも、同じ問題にもう一度ぶつかることです。低次には、只憶測して真実らしいことを考えるだけの愚かな意見があります。ここにあるのは井戸端会議、市場のざわめき、辛辣な口論、響き渡る罵倒、怒りや熱気や同一意見による軋轢によって信じさせるもの全てがあります。それは人間の思考の広大な本性です。巫女や予言者たちの王国です。それは言葉の後を辛うじて追い掛けて、音声の十字路で生じ、思い違いに執着して、新たな波紋を呼ぶ不条理になります。ここでは精神そのものが結び付いて自分自身を分割し、一種の恐怖心以外からの動機はありません。遠くを探さないで下さい。もしもこの思考に名を付けることが出来るとしても、この思考は私たちの裡にあるのです。この思考は全ての始まりです。正しい見識を持つ人が、言わないで置くことを覚えるのもこの思考です。そうでない場合には、人夫に拳を上げたり、給仕の頭に皿を投げるのです。倍加した罵り言葉は、この種の狂気を隠します。それは人生の谷間ですが、誰にでもあるのです。

その上で正しい人は、慎重さと節度という特徴を持っています。人間は人間の声を聴き、旅をして、職人と仕事、町全体の慣習、広く認められている格言、心密かに繰り返されていること、そしてもっと適切に言うなら、人が行っていることを観察します。習慣による論証がここではあらゆる力を持っています。何故なら変わることはない習慣は、現実の条件と合致しないようなことを認めるのは困難であるからです。この知恵は職業として覚えますし、同様に売ることもします。ゴルギアスの論証は、彼に意見を求める人々、更に彼の意見を理解したいと思う人々の言葉を引用することだったので。これらのソフィストたちの多くは立法者でした。しかしもっと適切に言うなら、あなたは水先案内人、農民、樵、漁師、狩人、徒弟だった人から親方になった人々を感嘆して見て下さい。彼らは植物、雲、水面の波紋を了知しています。天気、収穫時期、渡り鳥の飛来を予想する幽かな目印を感じ取って嗅ぎつけます。薬になる植物、害になる植物、食料になる植物を教えてください。それらの全てを殆ど間違えません。しかし道具や機械、弓、梃子、車輪、水車、舟、雌牛、犬、猫、小麦、腐植土などの発明品の全てを、人がそれらを知る限り、大いに試して検討して見出されたものなのです。それらの理屈が探求されるよりも大分前を、もう一度考えなければなりません。人間にこの摂理がないとするなら、時間的余裕がなかったからです。そのことに感嘆するのはまさしく正しいことです。そして今では専門家とその技術を尊重するのが一般的な風潮になっているのですから、あなたは成功した者を尊敬するように心がけてください、と私はつけ加えて言います。この有名なリフレインを少し唱えて下さい、「我々は物自体の何を知っているのだろうか。我々の上に及ぼす効果が我々には重要なものの全てである時、知識は我々の役に立つのだろうか。そして更に、我々に軽く触れたり、傷付いたり、時には殺したりするこの未知の實在に関して手や眼や耳への効果でないとするなら、これまでに我々は何を認識しているのだろうか。そしてこれから何を認識するのだろうか」。この明証を自分に与えなければなりませんし、満足も自分に与えなければなりません。

大変に結構です。しかし、これが全てではありません。幾何学を少しでも聴講して勉強した人なら、本当の認識は信頼を与えているこの種の証明には関係がなく、それを疑うことも出来るのです。それらの幾何学の証明は、決して信頼とは無縁です。反対に、不信を与えます。それらの幾何学の証明は、経験を全く素通りして行く訳ではありませんが、厳密には証明しなかった処が質問状態の儘残っています。それらの新しい結合は仮説と言われています。賢明な幾何学者は、それらの仮説に真実か虚偽かを与えるのに十分気を付けます。私が仮定するものは、真実でも虚偽でもありません。真実であるものは、仮説から命題への帰結なのです。更に、命題は完全に真実であると言えるのでしょうか。この気高い美しい言葉は、私たちに慎重にさせてくれます。命題は、仮説が事物の本質を極めて正確に表している限りのみ真実なのです。それでは経験によるのでなければ、如何にしてそれを認識するのでしょうか。プラトンは、仮説から結論へ何時も降下する普通の幾何学のあらゆる長所を間違いなく表しました。そして最後に言うようになるのですが、人が求めているものにより良く準備された網を、経験の中に張ることしか決して行わないのです。今は、少なくとも何かを裏切った顔付きをしている者たちから、幾何学者たちの利益を削って下さい。定義と経験の間の道を判読する、活発で絶対に間違えない計算家に諂いたくなる欲求を、すり減らして涸渇させなければなりません。その様な人物は水先案内人を驚かすでしょう。同様に、手形の割引を計算する術を知っている者も高利貸しを驚かすでしょう。しかし実際には、もしも数学が要約された創意工夫からなっているなら、それも一つの技術ではないでしょうか。それとも眼を閉じて実践すること、まさしくわざと眼を閉じるのも技術ではないでしょうか。数学者は知らないことを自慢します。この様なことが彼の常套手段です。代数は、人が言っていることを認識する重荷を軽くします。これらの威信は、有名なア

ンリ・ポワンカレの哲学的発展の中で働いています。操り人形の見世物では礼儀正しく見とれるように、先ずは心を奪われる儘にならなければなりません。プラトンはその門の入口で私たちを待っています。

仮説を少しも見詰めないのなら、好奇心を持っていないに違いなく、殆ど自分の精神を愛していないに違いありません。何故なら如何なる仮定でも構わなくなるからですが、それが仮説でしょうか。そうではありません。私が仮定する時は屢々推測しますが、単純な推測からでは何も証明出来ません。少なくとも精神に相応しいものと結び付きながら、今度は全く幾何学者と逆に、仮説から仮説へ廻ることが重要になります。ここには事物の秩序と全く反対の、寧ろ無秩序と呼んだ方が良いデカルト的秩序が現れます。プラトンはここに私たちを置き去りにします。恐らく精神に従って仮説を秩序づけることは非常に困難であるからでしょう。しかし時々プラトンは、単から複へ、同一から別々へ、静止から運動へ、存在から非存在への対立のように、何らかの対立を私たちの精神に対して輝かせます。その中で人は先ず、知識による或る無秩序しか見ません。パルメニデス（2）のような奇妙な戯れであり、何も導きません。

プラトンはもっと良いことを言っています。というのも経験はここで私たちに何も教えることが出来ないので、思考というまさに名誉のために、最良の秩序を見付けることが重要になるからです。それ故に私たちの試みが如何なる価値を持つにせよ、今の私たちを導くのはまさしく思考することなのです。そこから『国家論』の素晴らしい曙が、二つの太陽を一緒に見せてくれます。その一つは、感覚的事物による感覚的神であり、それは感覚的事物を照らします。もっと適切に言うなら、河や収穫や動物や人間として存在させます。そして、英知的事物の地平線にはもう一つの太陽、つまり全ての観念を理解可能にして、全てを生み出しもする〈善〉の観念があります。しかもこの〈善〉は、観念と言うことさえも出来ません。それは立派さにおいて、その存在にも観念にさえも勝っています。素晴らしい太陽です。プラトンはそのことを最早言いません。これで十分なのです。真実そのものを言うなら、ある意味では真実は超えられています。実際に私たちがあらゆる暇を使つての旅を終えた今、真実は私たちの遙か下方にあります。真実でないものとは何でしょうか。全てが真実ではないのでしょうか。国家的理由はないのでしょうか。魔法使いにも、狂人にも言い分はないのでしょうか。プラトンは私たちをそこから指揮しません。彼は少なくとも自ら身を投じると共に私たちも投げ入れるのは、間違つて思考するのが出来ないことの中であり、それは何も考えないことであり、何ものでもないことです。

この例からお分かりのように、その注意力は如何に倍加され、そして更に如何に倍加されるのか、それは宗教的に細心にテキストと結び付き、ついには著者自身の外へ著者を引き出して仕舞います。それは著者のテキストを捏造していると言われるのかもしれませんが。しかし、人がテキストの上を飛び立っているとさえ信じる瞬間に、次の頁はその人が言っていたこととこだましているのを私は何回も観察しました。注釈者のこの遊戯は、何回も読み直すことが前提です。そして、手にペンを持って創つた抜粋は殆ど読み返されないことに気付いた後で、私は引用して書き留めて良いことは何も無く、記憶に留めることで探さないことであると知るに至りました。寧ろその本に書かれている思考なら、どんな処でも躊躇することなく見出せるまで慣れ親しむことです。これは教養でしかありません。何故なら野蛮人が先ず抜粋を創つて、それしか読み直さないとしたなら、如何に野蛮な人だろう、ということになるからです。この野蛮人は人間の中にもおりますし、そのことを私は良く知っています。全ては読むのを学ぶことです。

私がここで言いたいことは、既に私が何かを教わつたプラトンというイマージュの中にある、上がったたり下がったりするこれらの旅ですが、それは容易ではなく、人は新たに難解なものを発見するでしょう。プラトンは翼と勇気を与えてくれます。晴れた日にはこれらを利用しなければなりません。霧の日にはデカルトの慎重さを持ち出し、スピノザからは二百歩の処にある太陽を守らなければならないことも私は学びました。そういう訳で、もう一つのヤコブの階段を登るのは難しく、素早く専門家が魔術師に、計算家が専門家に舞い戻るように、どんなに容易に人は舞い戻るのかに気付いた私は、この不安定な状況が私たちの本性であると思いました。そして私たちの運命は、ソクラテスが大変上手く行う術を知っていたように、常に愚かさから出発して愚かさへ素早く戻るのであると私は思いました。こんな風にして、ある時は「いや、これでは未だ不可ない」と私たちは自分に言い聞かせて、拒絶から拒絶へと上がって行きます。そして反対に、受諾から受諾へと〈善〉の考えを失って、私たちは最低のものになることもあります。最低のものとは眠りです。私にはすっかり分かっているのですが、古代ギリシアの巫女は両眼を開けて眠りますし、巫女の占いを聞く者たちも殆ど目覚めていません。技術者もこの反芻状態から遠くありません。結局のところ人は高次に止まりませんし、途中の段階にも止まりません。それでは結末はどうなのでしょう。この継続している脈拍が私たちに意識を与えているのであり、プラトンの天界に相次いで触れることが、私たちの思考にとっての唯一の光になりました。要するに私に与え

られていたものは、人間としての高度な考えです。というのも人間は誰でも屢々意識を持ちますが、僅かな時間であることを私は良く理解していたからです。そこから意識の大問題に殆ど匹敵すること、私が既に説明したように意識という言葉が持っている唯一の意味に立ち戻らせることを屢々私に思わせたのは、眠りと目覚めの教説です。これらの問題の論拠には再び触れることになるでしょう。しかし、難しい分析は一先ず終わりにして、全体を俯瞰しなければなりません。もしも私がそれらの証明が可能であるとしても、私は決して与えないでしょう。それらの問題は、門戸を開けた儘にして置かなければなりません。しかも人は態度を決めて保持することも要求されているのです。しかし、一度に多くを言い過ぎないようにしましょう。（完）

（１）グジェースはリディアの王（前六八七年？～前六四八年？）。プラトンによるギリシア文学の伝説では、空想で妻と結婚して魔法の指輪で姿を消す力を持ったと言われる。

（２）パルメニデス（前五一五頃～前四四〇頃）は、古代ギリシアの哲学者で、エレア学派の祖。



## 執筆者のプロフィール（五十音順）

---

### 北岡善寿（きたおかぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『櫃』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

### 宿谷志郎（しゅくやしろう）

一九四七年東京都青梅市に生まれる。一九七〇年群馬県高崎市に転居。名曲喫茶「あすなろ」（催華国氏経営）を経てデザイン事務所に勤務。群馬交響楽団のPRを担当し演奏会のポスターをデザインする。一九七七年広告代理店を設立し医薬品、検査機器の広告をはじめ編集、イベントなどを手がける。トヨタ財団助成の「シビクトラストフォーラム」に参加。まちづくりのための資金づくりについて学ぶ。自治体学会創設に市民の立場で参加。一九八七年東京・青山に編集プロダクションを設立し主に書籍の制作。高村昌憲氏の「パープル」に関わり、一九九九年「風狂の会」に参加。大分県経済誌「アド経」に一年間エッセイを連載。明星大学教授・清宮義博氏の『花々の花粉の形態』などを出版。二〇一二年廃業。一年半の休養後、革工芸（革絵）を始める。現在、収集したカメラに着せる「カメラベスト（一枚の革）」を制作中。旅と地酒と人との出会いに憧れており、エッセイを年四回「風狂」に掲載したい。趣味はフルーツ。よく聴く音楽はバッハ、モーツァルトの作品。

### 神宮清志（じんぐうきよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近では視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

### 高村昌憲（たかむらまさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。学生時代に同人誌「遡行」を発行。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A&E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤忠詩全集』（土曜美術社

出版販売・二〇〇七年)。一九九六年に個人誌「パープル」創刊(四〇号から電子書籍)、同年「風狂の会」会員になる。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞(評論部門)。二〇一二年から電子書籍(ブクログのpapier)に、随想集『アランと共に』、アラン作品の翻訳及び個人誌「パープル」などを登録中。日本詩人クラブ会員。

中平 耀(なかひらよう)

一九三〇年生まれ、群馬県出身。詩集『吊るされた鳥』(思潮社・一九六一年)、『時の中の橋』(詩学社・一九七三年)、『樹・異界』(神無書房・一九八一年)、『花についての十五篇』(花神社・一九八六年)、『滑稽譚』(花神社・一九九二年)、『木』(花神社・一九九七年)。訳詩『マンデリシュタームの詩』(集英社『世界の文学15・ロシアⅢ』・一九九〇年)、詩評論『マンデリシュターム読本』(群像社・二〇〇二年)。二〇〇二年、『マンデリシュターム読本』により第四回小野十三郎賞特別賞。これからしたいことは、集大成した詩集を出すこと。

長尾雅樹(ながおまさき)

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

なべくらますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつづら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』(共著)

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』(韓国・呉世榮)他

原 詩夏至(はらしげし)

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』(共著)、句集『マルガリータ』『火の蛇』(第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞)、歌集『レトロポリス』(第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞)等。現在短編小説集『永遠の、地上の(仮題)』刊行準備中。典型的な「ウルトラマン世代」の「怪獣少年」で、齢知命に達した今もなお、心のどこかがその永遠の「神話」の森を彷徨い続けている。十代後半から二十代前半にかけてカルト的な宗教活動に没頭。その後フロイト、ユング、ラカン等の精神分析家の著作に傾倒し、一時は専門の心理臨床家を志したこともある。好きな書き手はJ.G.バラード、M.ピーク、尾崎翠、埴谷雄高等。絵画ならダリ、デルヴォー、バーン＝ジョーンズ、音楽ならドヴェツシー、ラヴェル、セロニアス・モンク等に魅かれる。日本詩人クラブ、日本短歌協会会員。

堀口精一郎(ほりぐちせいいちろう)

一九二七年三月、東京生まれ。青春前期は皇国少年として熱血の血をたぎらせた、いわば戦中派のはしぐれ。戦後は文芸特に短歌に親しむ。一九八九年仲間と共に詩誌「さやえんどう」創刊、詩を書き始

める。

詩集『マンモスの轍』（土曜美術社出版販売・一九九四年五月）、『神の魚』（横浜詩人会・二〇〇〇年十月）などを刊行。

二〇一四年七月、二五年間編集発行人を続けてきた詩誌「さやえんどう」を終刊。

同じく二五年間実績を残してきた月二回の研究会も解散。身軽になった。

現在は、日本詩人クラブ、横浜詩人会、風狂の会に所属するのみ。今後は楽しく生きてゆきたいと思っている。なお未刊の詩篇が多数残っているので最後の詩集を出したい。

松下美知代（まつしたみちよ）

一九四九年東京都中野区生まれ。早稲田大学教育学部卒業。職歴は、埼玉県中学校教員、アンダーソン・毛利・ラビノウイツ法律事務所秘書、メリルリンチ・ジャパン秘書。一九八八年に渡米。KPMG

NYで米国公認会計士として監査担当、ミズホ・キャピタル・マーケッツを経て二〇一三年十二月に退職。一九九四年に乳がんになり、半年後に腎不全になり透析を始める。不整脈で倒れたが奇跡的に生還する。一九九九年に脳死腎移植を受けて健康体になる。合計二十五回以上の手術歴がある。二〇〇〇年三月から二〇〇一年十二月まで、US TOWN JOURNAL に闘病記を掲載する。二〇〇一年九月十一日、フジ・キャピタルマーケッツに勤務して世界同時テロ事件に遭遇し、九死に一生を得る。現在NY生活を満喫しているが、老後は日本で、海や野生動物保護などのボランティアをしたいと考えている。戦国時代に興味があり、帰国したら駅弁を食べながらローカル線に乗り、温泉とお城めぐりをするのが夢である。

（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう)

2015年版上半期 (6号～11号・合併号)

<http://p.booklog.jp/book/93185>

編集：風狂の会 (担当：高村昌憲)

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/93185>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/93185>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ